

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二四年九月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十三巻第九号（通巻七五一号）

村上美江歌集『さみどり』批評特集号



9月号・2024年

冬雷大会のご案内

第63回冬雷大会は、今回もホテル・ルートイン東京（東陽町）にて開催予定です。

地下鉄「東西線・東陽町」下車徒歩三分です。

日時 十月二十日（第三日曜日）

午前十時 開会

午後四時半 閉会

午後五時より 懇親会

* 本年は好評でありました特集「誌上冬雷大会」の企画はありません。是非とも会場の方へ御足をお運びください。

冬雷「ネット歌会」ご案内

* 小誌月例歌会は休止状態ですが、ホームページにて「ネット歌会」が活発に行われています。会員ならどなたでも参加できます。ぜひご利用下さい。

〈冬雷短歌会〉

9月号 目次

冬雷集	1
作品一	30
九月集	46
残響集	50
作品二	56
作品三	66
七月号冬雷集評	山本三男 14
村上美江歌集『さみどり』特集	井上菅子他 15
七月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 28
『モンキートレインに乗って ファイナル』を読もう	桜井美保子 43
七月集 / 残響集評	大山敏夫 45
七月号作品二評	井上菅子・江波戸愛子 52
七月号作品三評	桜井美保子・橘 美千代 54
七月号十首選（冬雷集・七月集 / 残響集）	56
七月号十首選（作品一・作品二・作品三）	58
歌集・歌書紹介	佐藤靖子 61
歌集『白雲悠悠』	桜井美保子 66
駒沢信子歌集『風の行方』を読む	大山敏夫 69

冬雷集

大山敏夫 埼玉

この方も耳鳴りを言ひをり耳鳴りの辛さといふを少し考ふ
氣にせねば感じざるほどわが場合ときをり耳の奥ざわざわす
齡のことは言はないやうにしませうと思へど十月が来れば避け得ず
食の好みなども変化しそれよりも体重四キロ減のことは喜び
掛蒲団を抱き枕ふうにかかへ込み眠りを待てば至極落着く
われが翁と称ばるるなきは尤もと思ふなりこの寝相を見れば
動けるうちにしておかねばとこの人も言ふなり妻の口癖の一つ
老境といふにとつぷり浸り込む日々か何やら薄くて輕し

早起きの徳

赤羽佳年 東京

歌を詠む楽しみもある残り時間幾時間ならむ幾首残せるか
昼日中きはひて鳴けるうぐひすの成鳥のこゑ森にひびけり
競ひ合ひ森に響けるうぐひすの番らしきが声高に鳴く
ホーの一音伸ばして鳴けるは幼鳥か二音もホーとうぐひすの声
道越しに森より響くうぐひすの幼鳥のこゑ余韻を残す
盛んなる鶯のこゑバス通りこして聞ゆる日の照れる下
小半時鶯のこゑに耳鳴りを忘れてゐたり早起きの徳

退職後美大で学びし経験が今も活かされ制作をする
昨年より大きな作品に挑戦し単純な手作業ひたすら絞る
我が使ふ特殊な麻布織る人が少なくなりて価格高騰
酷暑続けばウォーキングは中止して涼しき部屋で作業続ける
老い故か時の経過が早すぎる制作に集中すればたちまち夜に
独居でも手抜きをしない食生活料理が好きで楽しみである
氷砂糖と青梅で作る梅シロップ制作の手を止め喉を潤す
目標が一つでもあれば嬉しいが物忘れひどく我を悩ます

兼 目 久 栃木

8人が雪崩事故死の事実から引率教諭の三人に有罪
教師一人生徒七人死去したり裁判所教諭に有罪判決
聞き馴れぬ判決用語禁固刑意味不明なり辞書にて調べ
エアコンの力たのもし暑かりし部屋もたちまち涼しくなりぬ
大根を売る農家の女あるじ葉っぱも食べよと言ひ添へてくれぬ
急病が出たかサイレンを鳴らししつづ午前3時半救急車走る
値上がりが一カ月前より緩和して200円となるキャベツの値段
くも一匹部屋の中にてちよろちよろす増えてはたいへん即座に潰す
山 崎 英 子 東京
遠き日に祖母と聞きたり毎夜の如くガチャガチャとくつわ虫

虫籠にくつわ虫飼ひてきうりを餌としたる遠き日思ふ
放さなければ可哀想と祖母に言はれ放ししを思ひ出づ
八月の祭に向きて笛太鼓あちらこちらに練習しきり
暑いのに袂の長き着物身につくる嬉しかつたと今にも思ふ
年重ね思ひ出すのは古里の事何といふ事なく全てが思ひ出
柿みかん無花果枇杷と季節毎楽しみたりし古里の味
雨の日に祖母採り呉れし蜂谷の熟柿の美味たりしこと

森 藤 ふ み 東京

東京駅改札広場に友を待つ人の多さと熱気のなかに
途切れなく駅に入りくる大方の人は八重洲口通路に向かふ
この広場にオーケストラのコンサート仕事帰りに聞きしも遙か
駅コンと呼ばれ小さなコンサートに初めて聞きしボレロ忘れず
壁にかける母の遺影に映り込む垣根のみどりきらきらとして
新聞の花の写真は山荷葉初めて知りたり白き花なり
水分を帯びると花は透明になるとふ不思議サンカエフの花
透明な花から落ちるひと雫を捉へた写真にしばらく見入る
盆の入りの朝は米炊き枝豆を茹でて仏に先づは供へる

橋に立ち 櫻 井 一 江 東京

幸不幸なんぞ言ひ居る暇もなく嫁して早々の真剣の日々
児の守りをしつづ自づと橋に立ち郷おもひ涙あふるるありき

一歳児を背負ひ立ちたる勝鬨橋に母の応援川面に求めき
 児の健診受けにバス停五つ程を嘗て歩みき勝鬨橋渡り
 我があれし近くに大川無く小川にて泥鰌や蜆は子等がとりにき
 文字深く刻まるる石碑「かちときのわたし」跡地にて勝鬨橋眺む
 勝鬨橋の塗装工事の掲示板週休二日制確保の工事と明記
 不可欠となりたる表示か工事中の立入禁止に英・韓・中国の文字
 隅田川の流れはゆつたり堂々と東京港へ進んでゆきぬ

有 泉 泰 子 山梨

念願の試合出場活躍中に骨折したると孫の試練や
 松葉杖操るも危ふい様に退院す孫よたくましくあれ
 四年生就職活動中なるに思はぬ試練杖つき乗り越えむ
 「思いやりの心で笑顔の花さかす」中一孫の投稿のあり
 いつのまに文章を書く子に育つラグビー野球と甘えん坊が
 猛暑なり予定したる墓参り断念す父母に会ひたし父の命日
 食細く骨皮筋右衛門となりたる身元氣になりて会ひにいかむぞ
 喜々として買物担ふ夫のをり感謝をしつつ料理に励む

富 田 眞紀恵 富山

物価高とふ一言も老深む私の頭を素通りしてゆく
 女ばかり四人でありし私の思ひ出は父の淋しげな顔
 家族とはこんなにあたたかいものかなと久々に来たる息子見てをり

「またね」とはいつの事かと思ひつつ帰りゆく息子見送るわたくし

黒 田 江美子 千葉

地元やど星野リゾート東京に二人の友と籠れば癒さる
 三番瀬星野リゾート東京ベイの借景となり辺りを包む
 リゾート客のマーケティング徹底と星野型やどの視点作りは
 小学校三年生の学習に郷土ボランティア十名集ふ
 コロナ禍を経て戻りたる郷土の学び今年は「盆踊り」なり
 三社祭八年振りに大神輿女神輿に子ども達も練る
 大神輿車椅子からの歓声に応へて施設の奥庭に入る
 古希祝ひの報告聞きたる三人の訃報の届く続けざまに

青 木 初 子 神奈川

何処よりか種の来りて街路樹に紛れて育つ枇杷の際立つ
 いつの間にか熟れたる黄色の枇杷の実の全てあらざり緑静もる
 木斛と黄楊の切り株にひこばえの次つぎ出づる伐りても伐りても
 隣家の更地にする時貰ひたる黄の実の千両根付き芽の出る
 隣家の更地のはずの土の面に木瓜の咲きたり離れて二株
 面会の二男の声を聞き分ける夫との二十分心安らぐ
 蒸し暑きこの月二回の面会日寝てゐるのみに心配募る

中 村 晴 美 茨城

梅雨寒に長袖着るは遠い過去エアコン回す今日は夏日

今年初ネットスーパー利用せり外は猛暑のカンカン照りなり
 じわじわとまたコロナの兆しあり第十一波とネット記事あり
 一晚に一月分の雨の降るまた土砂崩れ今度は松山
 ペランダより見ゆる平屋部の瓦屋根棟の漆喰劣化の目立つ
 切りがなく修繕箇所を目に入る築二十年を過ぐる辺りから

吉 田 綾 子 ☆ 茨城

ひとりでに生いたる南天咲き初めて雰囲気かわる静なる裏庭
 白々と南天の花咲き満ちて吹きくる風に揺らぎ止まらず

雨やみの明け方近くひぐらしの確かなる声屋敷に届く
 八十五歳老いても老いない友の声「綾ちゃん」と呼びつつ電話の長し
 ハイヒールを履きタワーマンションに独り居の友は会社の会長なり
 友のいう「海外の支店を巡りてシンガポールでのゴルフが楽しみ」
 小柄なる友ではあるが強健で頭脳明晰人柄のよし

山 口 嵩 福島

枝々の水滴はねて鴨はときに地に降り畑をつつけり

何時よりか佇みゐるか白鷺は微動だにせず夕暮れのなか
 未明より降りける雨の止みければミンミンの声たちまちしげし
 吾が「とき」の流れに重なる「こと」増えて今日の朝ドラ小学時代を
 在任中改憲せむと意気こめる総理に求むガザへの視察

橋 本 文 子 鳥取

小学六年登山楽しみに寝た我ら雨の音ききすぐに眠りき
 目的は果たせなかつた六年生修学旅行もなき戦時中
 小学校の話する友今は減り九十代は数へる程か
 米洗ひとぎ汁まけば雀きて我の庭は雀の食堂
 初採りの胡瓜一本塩少々皆で分け合ふ夏は来ぬ

酒 向 陸 江 ☆ 東京

「水上が懐かしいね」の一言に弟夫婦が誘ってくれた
 土木技師の父の手がけし藤原ダム湖畔に佇み父を偲びぬ
 小学校五年六年の頃なりきデコボコ道に重機の行き交う
 今はもう湖畔のめぐりどこまでも舗装されて緑は深し
 深い青広いひろい人造湖「熊出沒」の掲示あたらし
 こんなにも山奥僻地に育ちしか父母の愛しみしみ思う
 弟の手がけし高速道に行く妙義山山腹難工事なりしと
 父に似て口数少なき弟が難工事達成に表彰うけたと
 二日間弟夫婦の心尽し受けて甘えてただありがたし

京・丹後半島

天 野 克 彦 大阪

成相の夏山のぼり見返れば涼しき風のわたる橋立(成相寺)
 与謝の海と阿蘇の海とをふた分けに蒼空そらに伸びゆく天の橋立(股のぞき)
 水きよき与謝の浜辺に寝ころびて寄せくる小砂利の音にまどろむ
 白垂なる経ヶ岬の灯台は今も見守る沖ゆく船を

虫麻呂の歌に惹かれてかつて見し人なき浜辺にひとり佇む
愚かびとの浦の島子の跡見んとふたたび来たり水の江の浜
どこまでも透きとほる海のしづけさや浦の島子がおもかげに顕つ
浦島子祀る社に立ち寄りて気さくな宮司と浦島談義（宇良神社）

北海道ひとり旅

高 松 美智子☆ 栃木

退職の記念旅行はひとり旅まずは仙台友を訪ねて

名取川が海へと注ぐ閑上ゆりあけの水面平らかに海鳥のこえ

犬曳く人散歩する人ゆったりと津波の記憶の眠る閑上

嵩上げされたる復興道路を走りいてあれが荒浜小と友が指差す

夏至まえの遅き落日灯を点すタグボートの誘導に仙台港を発つ

ひと晩をフェリーに運ばれ太平洋はるか水平線潮目を眺めいる

苦小牧のフェリーターミナルに降り立ちて口を衝きたり拓郎の「落陽」

苦小牧漁港の名物ホッキカレー人気の店の行列に並ぶ

高 橋 説 子 栃木

折角のプールの授業は中止なり「危険な暑さ」といふ異常気象

明らかに去年より増えぬ登校班の日傘差す女兒むろん長袖

ノーマディア・デイだと言ひてテレビ観ずゲームもせずに見らは本読む

晩年の夫の脳トレ「点つなぎ」を孫は引き継ぎ「けつこうムズイ」と

残り湯に庭いぢりの汗流すとき血糖値の不安やや薄れたり

今度こそ主治医に誉めてもらふぞと血糖値を下げる工夫ふた月

コンビニの公開レシピで試作せり低カロリーの寒天スイーツ

感想文に難儀しをれば唐黍一本持ち呉る友「チンしてガンバ」と

巣作りを終へたるか鳩は静かなり「でえでえぼぼ」なる声聴きたしも

大 塚 亮 子 東京

コロナ禍となりて墓参も儘ならず気づけば既に三年経ちたり

この春に脳梗塞に倒れたる兄を見舞ひて四月よの過ぎぬ

一人暮せる兄を案じる我がもとに施設に入居と姪の知らせ来

電話にて元気な兄の声を聞き墓参に帰ると会へるを待ちき

倒れたるも頑張りくれたる兄なるに逝きてしまへり九十六歳にて

参列者世代かはりて知る顔の少なかりけり読経流るる

窓外に青々育つ苗を見て温み残れるお骨を拾ふ

住み慣れしわが家に戻り安堵してゐるらむお骨を祭壇に置く

荒川

嶋 田 正 之 埼玉

荒草の土手より静かに見下ろせば水面を掠めツバメが遊ぶ

草の香と水の香りのよどむ風遙かな空に棚引ける雲

音のなく荒川の面滔滔と空の光を揺らしてかへす

ゴルフ客運ぶ小さな船着き場船影のなく手持無沙汰に

足元に踏まれて咲ける蒲公英と風に我慢の綿毛が光る

去年逝きし弟を追ふ妹の訃を知らせくる水無月五日

弟と三つ違ひの巳年なり戦後の貧をともしに背負ひき

入れ替はり女孫の婚の話聞く泣いて笑つて今夜は眠る

江波戸 愛 子☆ 埼玉

海外へ行くので頼むと置いてゆく観葉植物ひまわりの鉢

ひまわりは咲きましたかとメールあり他国を友と旅する孫より

ひまわりの花を大きく写したる画像を君のラインに送る

韓国にまた行くというかずまくん会話にときどき混じる韓国語

北海道あなたとふたりで歩きたし知床礼文利尻の島を

陶芸をはじめた友よりもらいたる皿と小鉢を今日も使いぬ

年齢の七歳違う妹の運転にゆく兄の新盆

妹のスマホに見ているカーナビは混雑回避の近道をゆく

町 田 勝 男 埼玉

「沈黙の春」におとらぬ温暖化わが住む星をその手で壊すな

貢くれば優等生の歌ばかりわれの居場所はなかりしものか

朝なさに公園に巣喰ふ鴉めはわれを目がけていつも攻撃

夏椿一夜の贅のはかなさよ団地の角にさみだれに散る

「終着駅は始発駅」とふサブちゃんの唄のやうにはいかぬものかは

在りし日の歌会に詠みしカサブランカ愛づるに非ず食べる物とか

ジャガイモの茎は枯れたり腰まげて掘るのは億劫妻に頼みぬ

稲 田 正 康 東京

コロナの薬未使用のまま期限過ぐと足らざれば強く批判したらう

AIに何なにできるといふことなど調べもせず日にちが過ぐ

大谷が打った打たぬとニュースいひおだやかにこそこの世は移れ

ひびといふ医学用語はありません骨折ですといはれて帰る

リハビリを休みてをれば思はざるほどの弱さの脚にあること

「自転車こぎ」平常テンポに踏みながらいくらか疲れぬると思ふ

一人選ぶに十数人を立つるあり制度を愚弄すとぞいふべき

橘 美千代 新潟

コロナ禍にもひたすら守りきていまに母に胃癌の見つかる無念

告知ののち食欲なくしたる母の体力たもつに食事工夫す

七月五日生日に母は胃癌にて手術をうけむ転移無き祈る

父の医院あと地の花壇と実家の庭陽光とともに写真にをさむ

完全な胃なる母摂る最後の食事病院だすは普通食なり

母の胃癌手術終りて駐車場に聞くも今年の初めての蟬

胃癌の手術受けたる母の滋養にとメニューかんがへ作る肉味噌

梅雨の雨の晴れ間にいつきに咲きはじむ白き木槿のこぼれむばかり

ブレイクあずさ☆ カナダ

重き眼に佇む救急病院は混みあいてなお寂しきところ

看護師も患者のわれも移民なり強き訛りのとつとつ飛び交う

放射線技師のお国はどこだろう我が名を呼べば「スーザ・ブラック」

ぐらぐらと揺れる心の錨なれ検査の狭間に歌ひとつ詠む

まだ見えるまだ大丈夫だと言ひ聞かす東の空より光満ちゆく
古 嶋 せい子 熊本

雲低き昼にとぶ鳥しらさぎの常よりかぐろく見ゆるあはれさ
手を引かれ用足しに行く夜の廊病棟の夜つねに明かるし
さしよりの景は病の窓にして鳥かげ幾つよぎる朝夕
昼の窓よふけの窓に聞く音のいづれも淋しひとり聞く音
ひとひらの雲なき空の冬の月孤高といふはさびしき形
わが手足われのものは思へざる程に動かず動きてくれず
火照りたる両の足なでいつまでとおのれに聞けず人にも聞けず
浮腫きたる両の足首さやりつつ抓りてみたりしてをり吾は
啓蟄か雨水なのは分からねど病室の窓ひたすらの雨

姉 川 素枝子 福岡

枯たかと思ひてゐたる数本の稚きみどりにかかる風なし
櫛にも芽吹き遅速あるを知り楽しめたのしもごく単純に
たちまちに青葉となりて薄暗き櫛並木に糠雨のふる
薔薇園の雨にぬれつつ花の咲く時を日にち記す息子は
年金までとどかぬ方便の貧しきに薔薇の苗かひ奉仕する子の
金にならぬ為事たのしと人の言ふなるほど買へぬ幸せのあり
城跡に向く学童団それぞれに弁当負ひて引率されて
フェンスを巻きてしげれる木通蔓のぼり足らぬと空につるまく

亡き人と飯食すゆめを見ぬと言へば夢逆しまと一笑されつ

井 上 菅 子 山形

道の辺のクローバーに寄り四つ葉探す徒労はせずに帰り来たりぬ
余所の家の団扇サボテン明日咲く蕾を数ふ道に屈まり
言ふべきにあらぬは胸に秘めおけと睡蓮の花日暮には閉づ
待めなく不誠実なる過去の人銀竜草は半透明に

鰐広き夏の帽子に遮光して朝の散歩のざくろ咲く道
甥姪に世代交代せし家系苦勞は死語で化石のやうで
何の仕事もせずにあちこち疲れゐて屋根打つ雨の音さへ重し
ケータイのラインに遺る夫よりの「今から帰る」信じて今日も
川鵜潜りて魚くはへて浮くまでを見守りをれば腕の汁冷む

原稿募集

編集室では、会員の皆様から左記
のテーマによる原稿を募ります。

記

●島本赤彦の一首鑑賞
皆様が赤彦作品ならこれを選ぶ
という一首について自由にお書

きくください。

●先ず作品一首を二行分でお書き
頂き、その後、

*本文 25字×17行

でお願いします。末尾にお名前
を入れてください。

●締切日は、毎月15日とします。

*尚、掲載について細部はご一
任願います。

●宛先は編集室。

貴方を歓迎します

冬雷ホームページのネット歌
会に参加しよう。希望する
二首を選んで、事前に申込み
ます。
活発に動いています。
(広報係)

参加希望者は「広報・桜井美保子」
宛に最新号掲載作品から2首を
選んで申し込む。批評を受け、自
身も批評に加わることが出来る。
小誌ホームページにて今までのも
のが閲覧できる。ご活用を。

冬雷ネット歌会

七月号冬雷集評

山本 三男

子がくれし花に小さくおやすみと声かけ今日も床につく吾 富田眞紀恵
作者にとってこの花に声をかけるのはお子様に声をかけるのと同じなのでしょう。床につく前の行為がそのまま詠まれています、心情がよくわかる歌です。

小一時間掛けて馴染みの店に来て鯖一尾を購入もリアル 黒田江美子

最近では直接店員との交渉を行う買い物は少なくなっていますが、今でもこのような買い物をしているのですね。馴染みの店で売る方も買う方も時間をかけての様々なやり取りを楽しんでいるように感じられます。

矢車草植ゑたる覚えあらざれど二本芽を出す花鉢の中 青木初子

矢車草は道端で雑草のように咲いているのを見かける花で、繁殖力が旺盛なのでしょう。芽を見ただけで矢車草と判るのは、この花を種から育てたことがある

のでしょうか。

熱々の小さき饅頭ほおれば蕎麦の香りのほのかに旨し 酒向陸江☆

神代植物公園あたりの蕎麦饅頭でしうか。出来立ての饅頭のおいしさが伝わってくる歌です。一連の作品で公園内の散策を楽しんでいる様子がよくわかります。

釈迦は言ふ「愛するものを持つ勿れ」然れどされどとわれは生き来つ

天野克彦

釈迦の言う愛するものの中には短歌も含まれているのでしょうか。全てを棄てられれば悟りの境地に至るでしょうが。

下の句の口ごもるような歌い方が効果的で重厚な作品に仕上がっています。

耳かきに半分程の餌を与ふメダカ喜び水面に騒ぐ 嶋田正之

メダカの喜ぶ光景は作者の喜びでもあるでしょう。一連の作品で貰った数匹のメダカを大切に育てているのがわかります。作者はまだメダカを育てる経験は少ないようで、メダカの観察により新たな世界が広がっていく楽しさを感じます。

ゴールデンウィークは田植ゑのまつ盛り緑の羽を田植ゑ機ひろぐ

橘 美千代

田植え機の上の緑色の稲の苗を大きな鳥の羽のように捉えています。新緑の季節に水をはった田圃の中で田植え機が動き回る美しい景色が想像されます。梅雨の季節には早いゴールデンウィークに田植えを行うのはそれなりの事情があるようです、残って欲しい光景です。

ルバーブをまるごと齧るそばかすのひよりりとした子むかしの夫

ブレイクあずさ☆

成長段階にあるお子様の若さがよく表現されている共に、それが回想にもなっているのは見事です。ルバーブの特徴が歌の中でよく活かされています。

請求書のみ入りてゐる箱の奥なほたしかめて戻るあはれさ 姉川素枝子

箱の中に期待していたものは何だったのでしょうか。それを書かなかった作者のうまさを感じます。作者のやるせない思いがよく伝わってきます。

村上美江歌集『さみどり』を読んで

井上 菅子

同じ東北に住みながら、東日本大震災の被害の少なかった山形の私に、震災を語る資格は無い。

されど、震災の歌を取り上げずに『さみどり』を読んだとは言えない。

抄出した中からさらに選んだ六首。

整然と同じ形の窓並び茜を映す仮設住宅

診療所の津波ラインの赤き線待合室のイスより高し

あの時は出ない涙で読んでゐる「冬雷誌上に見る 3・

11

頼る人の無き重圧に耐へ偲ぶ仮設の天井真四角にあり

筆談で会話をしつつ隣人に気遣ふ仮設に暮らす親子は

あの時のままに止まりある掛時計痛痛しくて見つめて居

れず

大震災、津波という人生最大の、それも数百年に一度という災難に遭っても、事実をきちんと把握して作品に昇華する、その沈着した姿勢に敬服する。

村上美江歌集『さみどり』特集



《碁石海岸》

《歌集表紙（題字・野村瀧子）》



村上美江歌集

仮設住宅の同じ形の窓、津波ラインがイスより高い、重圧に耐えて見る仮設の天井などなど、適切な写真の目の訴える力が大きい。

「あの時」には数えきれないあの時がある。止まったままの時計も、そして大きな衝撃の悲しみは時が経ってからやってくる。胸が押し潰されそうな歌が並ぶ。

亡き夫を詠んだ歌が、同じく夫を亡くした私には、共感できてわが事として心に響いた。

恋をしてあなたの妻になりたくて献立綴りしノートと嫁入り

差し迫る一周忌法要の準備する終へれば遠くに行きさうな夫

天と地の間に浮かぶ大花火夫と見てゐるやうな一とき早くなく然りとて遅いわけでなく三回忌の夫何処にでも居て

生前よりも亡くなって後の夫の存在が大きい。一周忌までは側に居る気配、三回忌といってもいつでも側に居る。そんな気持は夫を亡くしてはじめて共感できる。

「恋をしてあなたの妻になりたくて」、初々しい率直な感情に惹かれる。

自己を見詰めた次のような歌には、震災や夫の歌とは違った一面が見える。

一枝の百合の香りに振り向けばそこに昔のわが夏のあり

ます。

心に響く歌の数々、そして見慣れているはずの故里大船渡の挿画ゆつくり頁をめくりました。真摯に立ち向かう村上さんの姿勢、歌の行間に満ち溢れており感動いたしました。健康に留意され第二、第三の歌集が上梓できますようお願い致します。

仲間うちの集まりでも優しい笑顔を絶やさない村上さんのお人柄だいすきです。

これからご指導お願いし、お祝の言葉いたします。おめでとうございます。

歌集『さみどり』に寄せて

井上 楨子

この度は歌集ご上梓心からお祝いを申し上げます。先ずは緑色の爽やかな装丁に感嘆しかり。また村上さんの東日本大震災からの体験と復興への思いを込めた貴重な作品を中心に、人生の一区切りとも言える素晴らしい作品群に深く感動しつづご努力に敬意を表しながら感想を書かせていただきました。

方向性見出せぬまま今日もまた目の前の皿茶碗を洗ふ
熱熱の鍋焼きうどん始めました口語調に私は弱い
一首目は青春の回顧だろうか。二首目はまだ震災の傷が生々しいころだろう。三首目がたのしい。ここに口語調を持つてくるとは。

他にも日常や自然を詠んだ魅力的な数首を抄出してみよう。
脱力はかういふ風にするとういシャラシャラシャラと藤の花揺る

重なりて花先尖る睡蓮の涼を呼ぶ白ひなたの紅

春近し日脚の延びて嬉しかりビオラ元気に身の色放つ

オレンジに梨桃レモン味もありもはや水とは言ひがたき水
緑には様々な緑がある。さみどり、緑、深緑、濃緑。葉が充実して逞しくなっていくにつれ、色が濃くなっていく。

歌集『さみどり』は、今のままでも十分完成度の高い作品集ではあるが、この後、緑、深緑、濃緑と、さらに大きく成長していく美江さんの作品を、私はずっとずっと見詰め続けたい。

田端五百子

村上美江さん。

この度は美しい歌集『さみどり』の上梓おめでとうござい

・大規模半壊罹災証明書「なにくそ」と強く言ひたくて
目がキツとなる 39頁

・天国と地獄の境目数センチ全壊半壊瓦礫の中で 39頁
続く余震、避難所での不自由な生活、原発事故による放射能物質の漏出、被曝の恐怖心かられる被爆者、瓦礫と化した町一。その悲惨さは表しようもなかったと思います。

比べものになりませんが、私自身も中越地震を体験して、瓦屋根の落下、蔵の崩壊、避難所での生活の中で、行政からの「一部損壊」の証明判定のくやしき。村上さんのこの二首、特に「なにくそ」「目がキツとなる」の語句が適確で、悔しさの中に痛快さがあり、とても心に響く歌でした。
印象深く好みの歌を少し抄出させていただきます。

・「陽ちゃん」といふ孫産まれたる友人の明るき声が青
空に抜ける 78頁

・津波にも地震にも耐へ生き抜いた「一本の松」枯らしたくなし 41頁

・われの病む時少し長くガス台に小さなホコリが一面に着く 49頁

・あの時は出ない涙で読んでゐる「冬雷誌上」に見る 3・
11」 54頁

・脱ぎたる靴置く白杖の位置定め見える吾より確かな記憶（視覚障害の人） 80頁

・こんな時傍にゐてくれたらいいのにな二度呟きてあと

は飲み込む 93頁

・塩だけで茹でる新ジャガほくほくの熱きを食べれば季節
動きぬ 120頁

・線香の香りおだやかに流れ来る座敷の中に亡夫居るご
とく 135頁

・五十年最初で最後の同級会地震後の友は鎮魂に集ふ

171頁

・歩くとは「少し止まる」と書くのだと同胞の来て仮設
の室で 192頁

歌集全体に詩精神が漂う中に、村上さん独特な語り口の作風により意表を突かれるのが魅力となっていると思います。例えば78頁の「友人の明るき声が青空に抜ける」、54頁の「出ない涙で読んである」、93頁の「二度呟きてあとは飲み込む」、120頁の「熱きを食べれば季節動きぬ」等々。

家や財産を失い仕事場を失い、コミュニケーションを失う、その喪失感と悲しみはどれほど深く大きかった事でしょう。村上さんの嘆きと悲しみを絞り出すような罹災などの切実な心情を詠出された数々の優れた作品は、文字どおり「生の証」であり何ものにも換え難い貴重な足跡と思うのです。読む人すべてに大きな感動を与えてくださるであろう巧みな表現に赤裸々な想いが良く汲みとられ、時のたつのを忘れて読ませていただきました。経験をばねに村上さんがこれからの人生をゆつくりと過ごされる事をお祈り致します。

歌集「さみどり」に寄せて

黒田江美子

村上美江さんが、冬雷大会の懇親会で野村灑子さんと舞台上がり、ふたりで女学生のように若々しくにこやかに歌っていた様子を覚えています。

村上美江歌集「さみどり」は表紙の写真、上品な題字も相俟って爽やかに心安らぐ歌集です。

冬雷の五十回大会の出席をめざして励まむ指折り数ふ

四年目の節目震災後報道のテレビを消して心静める

震災後の五年の「特集番組」については行けず悪夢に目
覚む

冬雷大会のあの日、村上さんは大きな目標を達成し満ち足りた思いで参加していたのだとわかりました。今思い返しても村上さんの決断の素晴らしさが良く分かります。

村上さんの歌には、大震災の非情な体験を嘆き悲しむ直接的な表現はほとんどないように思いました。私だったら、苦しさ、辛さをここぞとばかりに吐き出すように、声高に歌っているに違いないと考えていたのですが、「四年目の節目」

植松千恵子

どの歌も感じ方が素晴らしく、選ぶということが難しかったです。『さみどり』はいい題名ですね。心安らぐ色です。御主人亡き十年、復興の八年は「大変でしたね。」ですまされない、激動の年月だったと思います。家族を守り、自分を大切に生きた証は歌に表れます。

生き方がそのまま歌に表れる歌とは何といいものだらう日本に生まれてありがたいと何度か思ったとありますが、色々な人に助けられ、今の自分があるという感謝がたくさん歌集の中に出てきます。

沢山の人の恩に包まれて生かされ生きるこの先ずつと地元を愛する歌もいいですね。

津波さへ無ければここは日本一良いところなり故郷の海青色にみどりが交ざる春の海震災前より良き色の湾

最後にご主人が空から見守ってくれているという歌は胸を打ちます。

帰り道懐中電灯くるくると回して夫の星への合図

冬雷の仲間は応援しています。美江さんの健闘をお祈りします。

「震災後五年の『特集番組』」も見ることが出来ないのです。それほど途方もない巨大な自然界の威力による非情な体験であつたのです。

私は、東日本大震災四か月後の七月に遠野経由で釜石へ入り、津波被災地を南下、大船渡、陸前高田、気仙沼、南三陸、女川、石巻を視察しました。港に乗り上げた大型船、寸断された鉄橋、三階の窓に乗用車が突き刺さった校舎、鉄骨の骨組みだけ残った防災庁舎、焼けてしまった小学校、転倒したビル、市街地が丸ごと攫われて消えてしまった幾つもの町、行方不明の子を探す家族、どこに行っても何かに縛られたようになり声が出ませんでした。

半月はいつの間にか満月に天災のなき空に美し

大規模半壊罹災証明書「なにくそ」と強く言ひたくて目がキツとなる

あの時は出ない涙で読んである「冬雷誌上に見る 3・11」

漆黒の夜の海は未だ怖い況して静かだと攫はれさう村上さんは「天災のなき空に美し」と歌っています。天災のない彼方を羨む気持ちを読み取れて私はこの歌が好きです。『なにくそ』と強く言ひたくて目がキツとなる」その調子、その調子、目は口程に物を言うと言言葉がありますから。この歌を読んでなぜかほっとしました。「出ない涙で読んである」とても深い表現です。軽薄な自分が戒められてい

るようです。「漆黒の夜の海は未だ怖い」未だ、にこだわって上句を抜き出しましたが、下句の心情吐露には重みを感じます。

心に深く刻まれた歌から、

大地震大津波福島原発事故次々おそふ日本列島に

復興の力は波にのまれずに朝日のやうに暖かくあれ

『さみどり』に寄せて

桜井美保子

二〇二三年一月の或る日、村上さんから歌集を作りたいという連絡をいただいた。実家の印刷業が創業百十年の年にあたること、自身が古稀を経た卯年の年女でもある節目の時なので、是非ともこの年のうちに歌集を出したいということだった。たまたま私が作品一欄の選者を担当していることがあって、そこに所属しておられる村上さんから歌集に関する連絡があったのだと思う。微力ではあるが歌集作成のお手伝いを少しさせていただくことにした。

は、ことに感銘を受けた。亡きご主人への愛、ご家族への愛の深さは読者の心をも温かく包む。

歌ふとき生きてゐること楽しくて声が重なりエネルギーとなる

ラメ入りの海の青さの衣装着て復興の歌舞台にうたふ
あの人はいつも心の中にゐる何をしてても何を観ても
デイに行く義母は迎へが来ぬうちに外に居て待つと楽し
さうにして

「また明日」おやすみの後に子が語る明日があるつて良
いことだね

村上美江さん、歌集出版おめでとうございます。これから
も着実に進んで行かれますように。ご活躍をお祈りします。

『さみどり』感想文

酒向 陸江

村上美江さん、歌集『さみどり』御上梓、おめでとうござ
います。

大山編集長、作品二欄の小林芳枝選者にもアドバイスをいただきつつ、まずは村上さんの希望に添って必要な作品データを集めてまわるところからスタートした。二月のうちに二〇〇九年の入会当時のものから二〇二〇年までおよそ十一年間の作品を抜き出した。その数約九百七十首ほど。私がお手伝いさせていただいたのは主にデータをとめることだけで、あとのことは、村上さんの努力と熱意で進められた。春、夏と十分に時間をかけて、村上さんは歌集に収める作品を自選された。その中には何度も推敲された作品も含まれている。六百三十五首になりましたという連絡があったのは七月も後半となっていた。年内に刊行は間に合うかと心配だったが大山敏夫氏と小林芳枝氏に跋文をご執筆いただきだんだんと歌集の形が見えてきた。『さみどり』の題字は野村瀧子氏の手による。

さて二〇二三年十二月、印刷業を営む弟さんの手で歌集『さみどり』が出来上がった。表紙は川辺の緑と土手の桜の花が美しい風景写真。一頁四首組として大変読みやすく工夫されている。歌の制作年毎の扉を地元の東海新報社さんの了解を得て、その絵葉書の写真で飾ったことも村上さんの考えによる。歌集を手にとると岩手の風や空気、花の香、木々の緑などがどこことなく感じられるようだ。

歌集の中には印象深い作品が数多くあった。東日本大震災で大きな被害を受けながらも屈することなく生き抜く姿に

表紙の桜と新緑の風景はまさに『さみどり』。東海新報社提供の挿絵写真の数々の美しさにも心惹かれました。

美江さんも五十年代後半に御主人様を亡くされたのですね。立場が似て御氣持がよく理解でき共感しながら読ませて頂きました。

二〇一一年の大震災の後の短歌には、頼る人のない中、遅しくも明るく、素直な気持ちで御家族、友人と助け合い、励まし合って生き貫く姿に感銘を受け、尊敬いたしました。

若みどり黄みどり緑深みどり同じ色なし山の若葉は
雨の中夫の靴を処分する右手に重く涙溢るる

心臓をなでて眠りにつかむとす今日一日の私を労る
あの時は出ない涙で読んでゐる「冬雷誌上」に見る 3.

11

何よりの味方になつた貰ひ湯の地元の温泉は潮の味する
食ひ縛る奥歯に圧力かけてあつた此処にもあつた津波の
爪痕

何事も無かつたひと日ありがたう目覚めのラジオ深夜の
短歌

こんな時傍にゐてくれたらいいのにな二度呟きてあとは
飲み込む

年末に大掃除できる幸せよ 新年よ来い 神様連れて
ニュースでは知り得ない実生活の御苦労や工夫、そして何
より明るく前向きなお人柄に強く惹かれる短歌の数々でした。

そんな御苦労を乗り越えての一冊、さらに成長、向上されてゆく方だろうと、尊敬と期待を持たせてくれた一冊でした。どうぞ今後とも、御活躍されますよう、お祈り申し上げます。

歌集『さみどり』に寄せて

正田フミエ

歌集『さみどり』の御上梓おめでとうございます。美しい風景の表紙に見入りました。雄大な山に桜つつみと川の流れが、生きる力を与えてくれるようです。歌集には、余りにも突然の思わぬ場面が多い。その時々、現実と向き合い素直に詠んで、自分を鼓舞させるようにしたのかもしれない。と思いました。

若き日に貫ひし夫の手紙読む春くるきざしか雨の音する
私から又あなたへと思ひ書く夕べの明かり小さく灯して
義父義母とこれから共に生きゆくを夫が見守るか空に一つ星

恋をしてあなたの妻になりたくて献立綴りしノートと嫁

子と向き合い親を考えることにより、暖かい家庭が築かれ成長できるように思いました。村上様のご健康ご活躍をお祈りします。

歌集『さみどり』に寄せて

高橋 説子

村上さん、歌集『さみどり』のご上梓おめでとうございます。感想文を書くに先立ち、「村上さんとのやりとりを思い起こしつつ整理したところ、村上さんの美しい文字のお葉書四通、封書一通がありました。昨年からはメールや電話で近況報告をしております。

村上さんと初めてお会いしたのは震災後の第五十回冬雷大会の前夜、ルートイン東陽町のロビーでした。大船渡から千葉に避難されていた岩渕綾子さんとお目にかかる約束をしていたところ、お仲間の皆さんが一緒に現れたのです。最初で最後と決めるの大会参加、と仰って村上さんは、金子みすゞ氏の詩の朗読を披露なさったことを記憶しております。

入り

夫の背を流す様に墓石を熱めの湯にて拭き清めたり
一周忌仏に誓ふ「泣かない日」終へて安堵の線香揺れる
こうして一つの思いを区切り前を向く作者に、東日本大震災がやってきました。大変な体験を歌に生き抜くことを教えてくれました。

大地震大津波福島原発事故次々おそふ日本列島に
日と共に起き日と共に休みをり自然のくらし避難所に居て

大規模半壊罹災証明書「なにくそ」と強く言ひたくて目がキツとなる

診療所の津波ラインの赤き線待合室のイスより高し
頼る人の無き重圧に耐へ偲ぶ仮設の天井真四角にあり
方向性見出せぬまま今日もまた目の前の皿茶碗を洗ふ
夜半覚めて仮設の壁を見渡せばみんなの「愛」に囲まれてゐる

作者は、どんなに厳しい時でも人と触れ合い自分を見つめ感謝を忘れない。

仮設でも「我が家が一番」と言ひくるる障碍もつ子に救はれてをり

キッチンに水音跳ねて夏野菜グループホームの悴の戻る日

三人の母を持ちたる人生を七十二にして豊かと思へる

村上さんの「あとがき」を先に読み、すぐに涙が出てしまい、本文では「イイね！」の付箋だらけになりました。同年代であり共に夫を亡くしている共通項もあって心に沁みる歌が多いのですが、『さみどり』の魅力は大山先生、小林先生のすばらしい跋文に言い尽くされておりますので、私は別の角度から気に入りの歌を選びました。

自家用車に深き労ひの酒をかけ別れを惜しむ夏の終はりに

震災の辛い時にもよく走り動いて呉れたる車を手放す
待ちあたる納車の日なりキンキンに車内の冷えて乗心地最高

車は「足」であること以上に大事な「一人になれる空間」です。人知れず流した涙も、溢れる喜びの歌もみな知っているのです。

取り取りの自慢料理を持ち寄りて友の新居に冬雷会員集ふ

数へれば二十一品重ならず所狭しとテーブルの上

幾らでも口に入ると笑ひ合ふ実に今日のはめでたき日なり
佐野支部ではコロナ以来、例会は復活せず会員が集うのは新年会のみです。時折のこういう集いは、本当に大事なもので前向きな力を与え合えると、今まさに実感しています。

締切も迫り焦る私はここで佐野支部の仲間「お知恵拝借」を呼びかけました。「ギブアップ寸前の私めに皆さん『さみ

どり」を読んで心に残った歌をグループラインに送信して。」と。すると、来ました、来ました。主婦目線での共感する歌、震災体験者でないと詠めない歌、という声が多く寄せられ、私の感想とも重なりますのでここで紹介し、私の拙い感想文を終わります。

精米機の米のシャワーの温かさ両手で受けて両手ですくふ

本来の作者の温かさが出ている歌。(高松)

私も精米する時お米の温かさに嬉しい思いをしています。

幸せの瞬間。凄くわかります。(加藤)

(本郷)

生き方がそのまま歌に表れる歌とは何といいものだらう心の内を歌に表すと自分の生き方も歌に表れる。良いなーと思います。(川俣)

なにごともしなかつたやうな半月が被災地に浮かび手元を照らす

まんてんの星空見れば寒き夜も何かに守られてゐるやうな気がする

つらい状況に置かれても一縷の希望を見出そうと志向する気持。(高松)

心臓をなでて眠りにつかむとす今日一日の私を労る

津波にも地震にも耐へ生き抜いた「一本の松」枯らした

『さみどり』を読んで

野村 灝子

村上さんこの度は『さみどり』ご上梓おめでとうございます。確か前に「大会用」のあなたの歌に心に響くものがあり一票を入れたのがご縁でお手紙のやりとりがあり、お手紙の中でも構えずこの方となら一生おつきあいできる…とつきあいはじめて三〇四年になるでしょうか。電話でも、手紙でもやさしい心が伝わってきて、大好きな方です。

『さみどり』を二回最後迄読んで、大変な経験をなさり一層心身共にお強くなられてご立派だ！と心から思いましました。読んで好きな歌を歌集を読んで〇印をつけたのを次にあげてみます。

・ 新型のインフルエンザで気が付いたマスクをしたる目元が母似と

(皆マスクをしていると目しか見えないので誰かわからなくなるけど、目もとがお母さん似……わかるなア!!)

・ 一周忌仏に誓ふ「泣かない日」終へて安堵の線香揺れる
お二人は恋愛でご一緒になられた…と歌を拝見して思われ

くなし

震災の一ヶ月後にラーメン会で慰問に行った時の瓦礫の光景を思い出しました。一本松を遠くに眺めて陸前高田市の小学校でラーメンを提供しました。(斉藤)

頼る人の無き重圧に耐へ偲ぶ仮設の天井真四角にあり漆黒の夜の海は未だ怖い況して静かだと攫はれさうで拭い去れない目の前の不安や震災の心傷を感じ心に残った。(高松)

酒を入れ醤油を入れて煮物するこの幸福感はどこからくるの

毎日の平凡が本当にありがたい、そんな思いが伝わりました。(加藤)

十年の夫亡き日々八年の復興の町墓より見下ろす

どんな思いで過去と復興の町を眺めたことだろうか。墓より見下ろす、の言葉に凝縮されている。(川俣)

「大丈夫」人に言ひつつ自分にも「大丈夫」といふ不思議な言葉

私もよく自分に使う言葉です。人にも自分にも有効な言葉に納得です。(川俣)

ありがとうございました。以上です。

しました。私など長く生きてくるとどうしても許せない…という事も出てきますし、むづかしい。

・ 路の葉のひとつひとつにゑくばあり大きくもあり小さくもある

うちの庭にも路がたくさん出てきますが、路の葉に「ゑくば」があるなんて気がつかなかったヨ!! 今度よく見てみるからね。

・ 森の木の息吹が皮膚に通りきて秋の気配を小さく連れ来る

何という表現なのでしょう!! すてきです。

・ まんてんの星空みれば寒き夜も何かに守られてゐるやうな気がする

私も夜空を見上げるのが好きです。星空を見上げていると自分の考えや悩んでいる事の何と「ちっちゃい!!」と思う毎日です。

・ 七万本の中より残る一本の松原の松緑枯らすな

「奇跡の一本松」といわれましたね。地震にも津波にも耐え生き抜いた。

・ 青色に緑が交ざる春の海震災前より良き色の湾

私は海の色を見るのが大好きです。青い色に緑が交じる、この色私も大好きです。

・ じゃばじゃばと山からの水溢れ出し雨上りの森一気に息吐く

表現がすてきです。「一氣に息吐く」なんて私には詠めないナア!!

・見えぬ人に目の前の馳走説明す皿を持たせて「にほひ」も添へて

私事です稲毛駅から東へ15分位歩くと私達の高校がありました。その隣に県立の盲学校があり毎週土曜日は「盲学校ヘリデーディング」に行く人は〇〇時に〇〇へ集合して下さい。」と校内放送が流れ私も何回かリデーディングに行きましたので、駅等で盲人の方が道に迷ったりしていると私も歩行器をひいて歩く障害者ですが私にできる事は、すすんでやりたい!と思っています。よく「私にはそういう事できないんだヨね!!」という人がいますが「できない」ではなく「やらない」だけなんですよね。

・仮設でも「我が家が一番」と言ひくるる障碍もつ子に救はれてをり

そうヨ!! そういつてくれる子は宝だわね!!

・あの人はいつも心の中にある何をしてても何を観ててもご主人様は本当おやさしい方だったんですね。うらやましい。

・こんな時傍にゐてくれたらいいのにな二度呟きてあとは飲み込む

そう思う事多いよね。一人なってしまうと。

・自家用車に深き労ひの酒をかけ別れを惜しむ夏の終はりに

・高校で身につけしもののひとつにて鎌の確かな使い方なり

・今日も又弁当にアンパンの附録をつけて『いただきまあす』

等々今では卒業間近い生徒らは高校生活の想い出を31文字に詠んで卒業する! というのが学校生活の行事になっていて、読むと時代の流れを感じます。

今は短歌を詠むという機会を作って下さった高校の恩師に感謝しております。

時代もどんどん変わりますがこれからも31文字に親しんでいこう!!とおもいます。

村上さん『さみどり』御上梓誠におめでとうございました。今年も大会でお会いしましょう。お元氣でね。

■歌集紹介御礼

短歌誌「醍醐」三月号より転載

なにごともしなかつたやうな半月が被災地に浮かび手元を照らす
心臓をなでて眠りにつかむとす今日一日の私を労る
二枚だけ肩を抱かれし写真あり新婚旅行と退職記念
十年の夫亡き日々八年の復興の町墓より見下ろす
口角をほら上げてみていい顔よ人には言ふがついつい忘る
真白なページに歌を書きませう今ある私を見詰めるために

(南沢豊美氏抄出)

夫の生家は千葉の鴨川で弟の嫁ご達は皆車の運転が出来ますが私はできません。勇気がないんです。こわいんです。
・修正のホワイト多き友の手紙大丈夫の文字何度も見詰める

いいお友達がいていいですね。うれしいね。

・帰り道懐中電灯くると回して夫の星への合図
ご主人の星もきつと懐中電灯回しているあなたに気が付きますよ!! うらやましい!!

以上

私はやる事が鈍くなつて皆と同じスタートラインに立つには、数倍も努力せねば出来なくなりました。NHKの「チコちゃんにしゃられる」ではありませんが『ぼーッとして生きてんじゃねーヨ』と思う事が本当多くなりました。

短歌は卒業間近い時体操の先生がわら半紙をかかえてやってきて、高校生活の想い出を31文字(短歌形式)にまとめなさい。というもので皆口ではブーブーいいましたが、

一、何度も校舎が火事でやけたので冬でも暖房はなかつた
二、弁当を何段も棚のあるタンスの様なものに入れ一番下に炭火を入れた火鉢のようなものが置かれて温めて食べた。

三、広い校庭が春を過ぎると草が膝丈位になり学校そなえつけの鎌が何十丁とあつた。

その時私はそれらを想い出し、

短歌誌「歌と観照」5月号より転載

歌集『さみどり』村上美江歌集(冬雷)

村上美江氏の歌集『さみどり』は、二〇〇九年～二〇二〇年までに詠んだ短歌、六三五首を編年順にまとめたものだ。

義父義母とこれから共に生きゆくを夫が見守るか空に一つ星

夫の背を流す様に墓石を熱めの湯にて拭き清めたり

ガリガリと林檎の芯まで齧り付く私の元氣は二十八の歯

夫を亡くしてから短歌を詠み始めたという。人生の後半を義理の両親と生きてゆく覚悟、墓石を熱い湯で拭き清める悲しさと愛おしさと涙が見える。そして追い打ちをかけるように東日本大震災に遇う。その四年あまりを町内の中学校校庭の仮設住宅で生活しながら、元の自宅を修繕し、生活を再建していった。その中でも短歌を詠む事は心の支え、歌の仲間、生きる事の支えとなった。歌の重みを教えてくれる。

被災からの約十年の歳月を着実な視線で凝視し続けた歌の数々。詩情豊かに、的確に現実や事象を捉えた短歌は深く心に響く。人間の強さ、優しさ、人と人との根源的な有り様を静かに掌に載せてくれる。一度は手に取って読んで欲しい。

感謝とは感じて謝ると書くんだねあやまることの何と多かり
ふくよかに実る稲穂は手に重き手に吸ひ付きて日のにほひする

御礼……(冬雷編集室)

(太田節子氏執筆)

貴重な誌面を大きく割いてご厚意あふれた批評を賜りました。著者と共に、勉強させて頂きます。南沢、太田両氏に感謝申し上げます。

七月号作品一評

小林 芳枝

先導する祭りの白馬は糞おとし大衆の前晴れやかに発つ 田端五百子
これから始まる祭りにきりつと立つ白馬、出発前の緊張感が粗相をしてしまうが何ごともなかったように歩き出す。その一瞬を捉えうまく纏まっている。

富士山を三叡山から眺めおり澄みたる空に両手を上げる 斉藤トミ子☆
病を克服して地元の三叡山に登ることのできた喜び。この富士山は忘れられないものになるだろう。

欲しいもの健康かなと笑う夫いつもと変わらぬ誕生日 野崎礼子☆
一年を無事に過ごして一つ歳を重ね、これからも変わらないことを願って暮らす穏やかな日の一齣として誕生日がある。健康で充実した毎日が感じられて読んだあとに心が温かくなってくる。
こびりつく花を剥がすはしんどいと朝々道を掃く人の言う 長尾弘子☆

自宅付近の道路を掃除している方か。桜の花が濡れた道路に張り付いたら剥がすのは大変だ。聞いている作者の感謝の思いも感じられる。

朝早く頭の上を飛ぶカラス姉逝きてより胸騒ぎせず 松中賀代☆
鳥の鳴き声にもしやと思つて緊張していた日を振り返り、旅立ってしまった姉を思う。胸騒ぎをすることのなくなった今は寂しさが詰まっていることだろう。

運転中気づかなかった自転車の道が一番貧しきを知る 乾 義江☆
車の運転をしなくなったのだろうか。車道や歩道は整備されているのに自転車には曖昧な道が多いと気付かれたようだ。まだまだ自転車安全に通れる道を確保できるのは難しそうだ。

春の休みの娘の誘ひ断はりぬ子にも言はない理由のありて 稲津孝子
娘さんの優しさは嬉しいけれど辞退する、芯のしっかりした作者、何か不安があるのだろう。迷惑をかけてしまうかもしれないという心遣いも感じられる。

不慣れなる杖も電車に乗る気力ありて行きたし動物園に 大塚照美
歩行の助けになる杖も慣れるには努力が要る。上手く使えるようになって電車に乗り動物園に行きたいという前向きな姿勢が素晴らしい。

雨のなか歩いて帰る道もよしアプリが歩数を数えてくれる 鈴木やよい
しっとりとした雨の風情を楽しむような上旬からの展開が面白い。スマホに記録される歩数を期待しながら歩くのは現代的な楽しみでもあろう。

銀行のいすに腰掛け時を待つ様々な音を聞き分けながら 山本三男☆
順を待つ間の所在ない感じが見える。そんなに大きくないが様々な音を当てながら時間を過ごし、自分の名が呼ばれるのを心待ちにしているのだろう。

電車待つホーム彼方の薄雲を黄色く染めて陽の沈みゆく 中村哲也
ホームから見る夕景がうまく纏められて心に残る。「薄雲を黄色く染めて」が焦点であり確りとした写真実力を感じる。

七月号作品一評

藤田 夏見

火にかけた鍋焼きうどん湯気ふきぬ数独パズルに時かけてゐて 田端五百子
隙間の時間にと始めた、脳トレニングの数独パズルに夢中の作者。鍋焼きうどんの湯気が吹いていたと告白。私も時に数独パズルに熱中します。

しみ二つ洗へど消えぬセーターの胸に紫の花を刺繍す 野村灑子
洗っても落ちないセーターのしみを隠すため胸に二つの紫の花の刺繍を施された。生まれ変わったお洒落な仕上がり。セーターに作者の嬉しさが伝わります。

今までの倍程かけて歩みおり病みたる後の初の山道 斉藤トミ子☆
長期間入院治療をされた。リハビリも充分されたようだが病み上がりの筋肉はもとは戻らない。今までの倍ほどの時間をかけての山登りに大きな拍手。

富士山を三叡山から眺めおり澄みたる空に両手を上げる 斉藤トミ子☆

澄み切った空に両手をあげる作者の真向こうに富士山が聳えている。前の歌で登られたという山。結句の両手を上げるが晴れ晴れと読者の胸を打つ。
模写とは思いの外に難しくまったく同じに描くだけなのに 浜田はるみ☆
線の太さも緩やかだったり勢いがあつたり色の濃淡も単純では無いのですね。誰かの絵画を真似して描くということの難しさ。素晴らしい時間ですね。

農村に田植え休みという日ありき弁当茶など田に運びしよ 飯嶋久子☆
この歌に懐かしい昔を思い出しました。私の生まれた町は、昭和36年小学四年生の時に町村合併が行われる以前までは農繁休みなるものがありました。田植えも稲刈りも大人に混じつての作業、褒められるのが嬉しく成長の場でした。
起き掛けの踏み出す一步の向きを変え痛みに堪えてそろりと動く

朝の動き始めの体のこわばりと、腰の痛みに向き合い負荷をかけない動作を考

えている。以前ならば体は自然に動き始めたものと思う。この歌に共感。
生きてゐる内に伐らむと夫いひてをりにし花の下にきたりぬ 稲津孝子
今咲き誇っている花の下に夫を思う心。紫陽花の今年は一輪も咲かずして深く刈り込む庭師を危ぶむ 井上楨子
紫陽花は庭に何本か植えられているのだろうか、深く刈り込まれ一輪も咲かない味気なさに、寂しさと共にその庭師の仕事ぶりを危ぶむ作者の思い。

雨のなか歩いて帰る道もよしアプリが歩数を教えてくれる 鈴木やよい
スマートフォンの歩数計はちゃんと計測してくれるのです。通い慣れた雨の道を落ち着いた心模様の作者でしようか。
仕事終へ何者でもなきひととなる吾は強くない三日月見上ぐ 中島千加子
人は責務があれば守るものがあれば、いくらでも強く任務を果たせるのだ。とこの歌に思います。ひとりの自分に帰った時の頼りない心に花鳥風月はことさら美しい。

作品一

桜井 美保子 神奈川

歌舞伎座の舞台を見るは六年ぶり日差しを避けて開場を待つ
わが誘ひ嬉しとメールよこしたる次女と待ち合はす歌舞伎座前に
公演のイヤホンガイド二人分娘は借り来てどうぞと吾に

映画とは全く違ふ特有の体の動き見得の一瞬

幕間の昼の弁当襲名を祝ふ料理と小さな饅頭

芝居さなか振袖のままに襲名の口上述ぶる中村時蔵

たまたまに来たる六月の歌舞伎座は襲名公演千秋楽の日

風邪気味にあれど熱なし咳もなし周り静まる客席にをり

田端 五百子 岩手

ソーダ水ぶくぶく吹いて「子供みたい」五歳の孫に注意されたり

天上の父母に蠟燭点すがに薬をかかげて泰山木咲く

巻き癖も取れて暦は折り返し蝶先立てて茅の輪をくぐる

二つ蝶雨後の畑に仮名文字を描く如くに一時を舞ふ

朝もやの晴れゆき家並みの浮きいでく過疎進みをれど故郷うつくし

人の手の適宜に入りたるこの里山豊かに昆虫生息すと老いは

「熊出沒」緊急広報告げてをり山菜採り誘はれし朝に

尻端折り奴の如きいで立ちで黙と田隅に補植す老いは

大賀ハス 野村 瀧子 千葉

池のほとり角ぐみ蕾の林立し大賀ハスは優雅に咲きをり

蓮めである人の胸の高さにて蕾のままに大賀ハスは立ちたり

大賀ハスの並みて咲きある人工湖大人の背丈の半分程の高さよ

五時過ぎて陽はまだ高く蓮の花ささふる大きな葉つばの揺るる

大きな葉上むきに表を示ししに夕近くなれば西方に開く

日没後葉の西方に面みすが中にまつすぐ花の茎立つ

大賀ハスの葉群そよがせ吹く風の上をモノレールは静かにゆきたり

夕近くなれば花卉を閉づる花に添ふ葉の何と大きいこと！

正田 フミエ☆ 栃木

コロナ禍にあねの見舞を許されず遠く見守り久しくなりぬ

久し振にあねに会えると甥の告ぐ見舞予約はひと月前に

見舞にはあねに似合いの夏衣類いもうとと来てスーパ―巡りぬ

白髪となりたるあねは車椅子少し小さく見えるも久しい

久しいが声をかければ直ぐに笑むあねはわれらを覚えていたり

あねのため買いたる衣類広げればほうと言いつつ目を細めおり

二十分の面会時間またたくま手を振り続く施設のあねは

自家採種のバジル育苗ポット上ぐ香りさわやか二十個できる

二〇二三合同歌集送り来る片手に持てぬ厚さ二センチ
わが作の四十首をば読む度にその時々思ひ出の湧く
我が短歌読みて隣人の作に触れそれぞれの作感銘受ける

六月は曾孫二人の誕生日祝袋を早めに親に

大きめのバスケットの祝賀袋ピニャータとかいふ二つ下がりぬ

天井より吊した袋棍棒でひたすら打つは弟が先

誕生を祝ふ菓子らが山と出る続いて姉も袋に挑戦

誕生を祝ふケーキは親用意祖母は祝いのピアノ演奏

斉藤 トミ子☆ 栃木

我が佐野市全国一の暑さだとテレビのニュース体温程と

目覚むれば直ぐに散歩に出でる我れ早や早苗田に秋茜飛ぶ

起き抜けの散歩の汗をシャワーにて流して今日の暑さに向かう

朝朝の散歩にいつも会う人の晴れやかな顔生日なると

紫陽花を愛でいる人の直ぐ側に猪のいる新聞の写真

能登半島遠く眺める親不知海穏やかに夕日浮かべる

傘寿なる我れ祝われてこそばゆしやりたき事を皆に告げたり

八十で山登りできる仕合せよ高み望まず時間をかけて

高橋 燿子☆ 埼玉

川面染め日の沈みゆく梅雨晴れ間秩父の山並みかすかに見えて

這いあとの曲線朝日にきらめいて草むらに住む虫を知りたし

草むらを出でて畦道這いまわる夜を楽しむ主をみたい

義母の顔思う命日天ぶらを添えてそうめん供える暑さ

命日はおはぎと決めて来れども作る気失せる猛暑続きに

カリカリと桃を齧れば幼き日の渋み残る味蘇る

豪華なる七夕飾りに付け足して短冊に書く平和と健康

畑へと付き来る犬は胡瓜食べトマトを齧る芸をした後

浜田 はるみ☆ 埼玉

去年より暑い夏と聞いてから六月なのに秋が恋しい

布以外切ってはダメと裁ち鋏今では堅い牛乳パック切る

芍薬の季節になると思い出す今でも忘れぬ見事な替え歌

上から落ちる滝でなく岩間から地下に落ちる吹割の滝

河中の岩が流れを割り込みてごうごういう音気持ち良きかな

土色の太き蛇出ても騒がずに清澄庭園にてスケッチす

構図が気に入らなくても日陰に座らなくては描けぬ齢なり

野崎 礼子☆ 埼玉

天に向かい真っすぐ伸びたる立葵梅雨明け間近勢いの増す

古事記にも登場したるミズクラゲ古の人も心惹かれしか

透明の宇宙人が浮遊するギヤマンクラゲ不思議な生き物

ふあふあの洗顔せっけん泡立ててスッピンに戻る一日の終わり

ベランダは三十七度の熱風に洗濯物はたちまち乾きぬ
 本日は災害級の暑さですとニュース流れる梅雨明けぬまま
 健康は腸の健康と思う我発酵食品好んで摂りぬ
 じんわりと熱った体を和らげて冷たい甘酒元氣蘇る

飯嶋 久 子☆ 茨城

庭畑は猫の額という狭き茄子、胡瓜、トマトを植える
 米寿組三人揃いてのんびりと一泊旅行のプラン持ち寄る
 鈍行を乗りつぎ乗りつぎ行かんとす車窓の風景楽しみながら
 中東のおだやかなりし日訪ねたりシリア、ヨルダン遠き話
 道すがら死海に浮かびし日もありき濃き塩分の水味わいつつ

「死にゆく死海」見出しに大きく報じられ思っておこせりはるかなる日を
 流域国の水資源争いにまきこまれ湖面年々縮小し居ると
 今はもう海外旅行は無理と一つずつ思い出取り出し娘に語る

岩 渕 綾 子 岩手

重き足労りつつもリハビリす津波に吞まれし人偲びつつ
 万緑に友ら集ひてデイケアに僅かな時をポッチャ楽しむ
 貫ひ火で半焼したるは三月前解体始むる家主の心
 誕生日「九十二歳おめでたう」末の孫よりLINEにメール
 友よりの桜湯のめばあなうれし九十二歳を祝ふがごとく
 ドライフラワー背を偲びつつ手作りす和氣藹あいと仮設で友らと

松原の黒松使ひ箸五十膳老いたる人がクレセントシティ市に
 練習船「かもめ」が繋ぐ箸五十膳友好の箸は橋となりけむ

樗 木 紀 子☆ 東京

初蟬の声を聞きたるその直後雨降り出でて蟬の無事祈る
 隣庭の公孫樹、桜木、みかんの木緑一色社を被う
 窓を開け広き隣庭の緑眺め両手を広げ深呼吸する
 土曜日は「なりひらホーム」で麻雀す運よくいつも晴天の日なり
 週三回足の治療の通院にペットボトルの水をよく飲む
 舗装路のすき間に生え出たすみれ草思わず残った水を掛けたり

田 中 祐 子☆ 埼玉

湯上がりの寛ぐ膝へ何やらのストーンと落ち来ハエトリ蜘蛛か
 すばしこきハエトリ蜘蛛の可笑しかりティッシュに挟み戸外へ放つ
 発芽より楽しむ花壇へ水を撒く百日草の小花小花
 腰痛のすっかり癒えて昨夏に子の買い呉れし夏靴を履く
 結局は何も買わずに帰宅してしろがね色の夏靴楽しむ
 先生の髪にしらがを見つけたと園児の囁き嫁は笑いて
 天職と自ら述べる保育士の嫁を大切に見守り行かむ

倉 浪 ゆ み 埼玉

長き年月世話になりにし整形の医院をはるは淋しくかなし
 まなことぢ友の唄ふを聞いてゐる朗朗とながる「秋田おはら節」

亡き叔母の好みし花よ白百合は偲ぶがやうに今年も咲き初め
「お母さん年をとつたね」と言ひし子よ君も五十路ま近となりて
来し方を振り返りみれば我人生大勝はなし大敗もなし
鎌倉の珈琲館の庭に咲きし凌霄花今も忘れじ

白壁のあをの朝顔すがすがし道ゆく人等足とめて見る

林 美智子 ☆ 東京

四年生就職決まるももろもろの経費思えば生活苦しと
都知事選投票べ切の午後八時当確と出てあつけ無く終る
突然の猛暑に耐えずクーラーを終日つけるが普通になりて

長 尾 弘 子 ☆ 東京

河川敷下り立ちみれば目をうばう落書だらけの橋桁あり
落書を白い塗料で消す人の作業服の背汗に濡れいて
曇天の川原をかすめ飛ぶ燕白き腹みせ頭上を過る
河川敷一面赤くポピー咲く友より届く写真うれしく
足止めて道沿いの花壇ながむれば手折りくれたりほととぎすの花
丈高き草の靡きの向こうには川の流れに光がはねる

矢 野 操 ☆ 香川

日にひとり以上から出る笑顔声かけ惜しまずスーパーを出る
児童期の妹へあまり遊ばずに高齢の詫びこづかい渡す
ねむる前ベッドの上の懐中灯あかりがつくかたしかめて見る

声だけは老けておらずに挨拶のお元氣そうねきよのよろこび
生まれたらきらわれるはえ蚊ゴキブリ殺虫剤の並ぶスーパー

松 中 賀 代 ☆ 高知

連日の猛暑に花木生き物も一雨を乞い撓垂れている
しばらくは雨が続くの予報見る畑作物も生き返るのか
雨の中野菜の虫を捕る作業一度休めば倍にひろがる
となり家の全部の野菜げんきあり初採れですときゅうり三本
夕暮れに早く仕舞えと畦に立ち明日明日と言う夫だった
過疎進む田舎の町に驚きの神社建設始まるを聞く
蝶蝶が交互に止まり蜜をとるガーベラの花かすかに揺れて

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

ざりがにを釣りし小川の既になく荒草茂る排水路となる
神ならぬ身の知る由もなければ命知りたし七十過ぎて
ピラルクの我をも凌ぐ大きさよ大水槽の中ゆったりと泳ぐ
わが町の脳を直撃する暑さ全国一位のニュースに頷く
白雲のゆっくり流れていくを見る露天風呂の上青空広がる
隠れたる野薔薇の枝が指を刺す手当たり次第に荒草抜けば
説明の通りに焼いた冷凍餃子羽根の付きたる出来上り良し

村 上 美 江 岩手

カナダよりのエアメールを開けるととき異国の空気もたらされをり

世界地図広げて指差すマニトバの極寒の地へ想ひ馳せなむ
友と行く施設への旅もおかへ友の母との面会嬉し
りんだうの一輪届ける友の兄施設の母にと自転車走らす
友の兄季節の花の一輪を母に届ける面会の度

久々に再会果たす吾のこと覚えてゐるかトドアに手をかけ
友のこと案ずる故に吾のこと思ひ出したり嫁ぎし昔を
靴脱ぐを忘れて見入る友の母体調良き日の晴天の施設

伊 澤 直 子 ☆ 東京

空港に近いホテルは境港市窓を開ければ夏の日本海

朝食はこの時期山陰名物の白いか甘えびいろいろ並ぶ

白いかは甘くねっとりやわらかく多めに取りて味を楽しむ

二歳にて別れたあなたの母の墓黄色の小花に一面覆わる

土葬にて一つ離れて立つ墓を一家のところに移す段取り

数年前大山寺地区に開かれた「豪円湯院」という名の温泉

温泉の入口には鳥居ありて湯殿に神棚の祀られており

夏緑庭にあふれる中に一つゼラニウムの真紅鮮やかに光る

乾 義 江 ☆ 茨城

起床時のみ須臾の腰痛に整体師の神経痛とふ疑問の残る

死ぬならば老衰がいい我が願ひ卒寿を迎え老を侘しむ

旅館や家の多く閉ざせる阿字ヶ浦閑散として釣り人も見ず

穏やかな那珂川の河口をちかたに漁をするやら小舟が二つ

息子訪い外食誘われ大洗に直前に気付く義歯を忘るる

若きらが欲する紅生姜に梅探し不作のなかにも良き梅調う

燕が二羽連れ立ちて代わる代わる「カワチ薬品」の庇を突つく

永 光 徳 子 ☆ 東京

朝々に花の水やりする吾に番の鳩は今日も寄り来る

電線に並びて止まり吾を見て声をかければググーと鳴きぬ

此の冬に切り倒したる泰山木鳩は好みて巣作りをしき

木を切れば土鳩に詫びて池を埋め墓にも詫びて独り居保つ

年を経て季節の風情薄らげど土鳩は今日もデデッポーと鳴く

久々の娘は鳩の鳴き声に昔と同じと懐かしみいぬ

稲 津 孝 子 福岡

停まらむとしたる右足動かずに車が少しづつ動きゆく夢

ブレーキを踏むことできぬ夢覚めつ免許返上せむとぞ思ふ

叩く事ならぬ蠅叩き履く事はせぬスリッパのありし玩具箱

健やかなる夫と行きし九重の山に見つけし銀龍草を思へり

直近のこと忘れつつタイマーに頼る三分五分十分

朝倉の三連水車回り始め北部九州梅雨に入りたり

介護せし我のため来給ふボランティア庭の地蔵の服縫ひくれき

眠られぬらしき夫が目を開けてある時有難うと言ひにき

目の前に坐る男の子の開く絵本の表紙ティラノザウルス

戸部田 とくえ 福岡

強風に負けじと歩く時としておのれの馬力に驚けり

町内の老人会に出席して衰ふる話ばかりに疲るる

山椒の実とりつつ誠うれしさの募り作らむちりめん買ひて

捨てきれず再びしまふ洋服を優柔不断とつくづく思ふ

かつてない日毎咲きつぐ夏椿惜しみてやまぬ一日限りの

そよぐ風みつつ安らふ貴重さを稀なる風情のけふの賜物

鯖街道「平八茶屋の麦とろろ」子と約束せりいにしへの味を

牛蛙の声せる川の瀬ようこそその思ひにきけり元氣にゐてね

大塚 照美 兵庫

水無月の宵の口なる空のいろ見渡す限りの青磁うつくし

暮れ近く立木に戻れる雀らの賑やかなるを時に羨しむ

紗のカーテン通せる大きき夕つ日の落ちゆく速き意外に早し

何となく晴ればれせぬ日の続きゐてこの夜は早めのひとり焼肉

甘きものの無性に欲しき時ありて心の疲労と人の言ひたり

完治なき緑内障ゆゑ程ほどにと再びはじむる「大人のぬり絵」

病む友へ無沙汰を詫ぐる手紙書くわれの病は歳相応とのみ

フット・ワーク軽き息子が水廻り立付なほして帰る五泊のち

吉村 昌子 千葉

運転の免許返納を子が言ひて電動自転車買ひてくれたり

自転車に乗りてゐるわれを友が見てスピード出さずゆつくりと言ふ

八十七ばあばは若く見えるけど年は年なり自覚をせよと

夏祭りの話に役員集まりて神輿と出店と踊りの相談

庭に来る蝶と同じに子ら達も雨止みたればすぐ公園に

娘来て部屋片づけてくれるけど我必要なもので捨てて

娘来て夕食作りくれるあじ料理上手だった姑の味

井上 楨子 新潟

吹き降りに巣を落としたる軒先に一夜明けても蜂ら飛び交ふ

盂蘭盆に孫らも手だすけするといふ確約はわれの支へになりつ

老後にと階下に部屋のリフォームをすれど介護思ひて心弾まず

病院の夫に付き添ふ待合室にわが休養のごとくゐ眠る

池の面を低く飛ぶ蜻蛉目掛けて跳ね上がり食ふ錦鯉は未だ幼き

仕送りをたまにやる孫いち早くわが生日祝ひのメールをくるる

絶え間なく雨降る夕べ薄暗き客間に点る湯沸し器消す

感電をしたる鴉か唐突に自転車走らすわが側に落つ

吉田 佐好子 ☆ 茨城

光る君のドラマ始まり原作の現代語訳を読み返してみる

何よりも読みやすいのは漫画版あさきゆめみし大和和紀

小説の現代語訳は寂聴か田辺聖子が面白い

人物の人間関係複雑でウェブサイトで相関図見る
推しキャラは何人かいるが六条の御息所が一番手
昨今の韓流アイドル美しく光源氏のイメージ重なる

鈴木 やよい 東京

電車乗り席を選べど走るうち強き日差しはこちら側となる
熊野古道に行きたしと言へばすかさず「早く行くべし足萎えぬうちに」と
美術館へ向かふ道には木々繁りみどりをまとふブロンズ像の立つ
さすがプロと言ひて夫は農家より野菜買ひくる畑の帰りに
乗換へに急ぐ階段足上げて一瞬止まりぬカナブン死にをれば
言ひたること後で悔やめど仕方がない冷蔵庫には葛餅がある
曇天の重き湿気にバス待てばこめかみ伝ひて汗の垂れくる
込み合ひたる電車のドアにへばりつき雨降る外を眺めて耐へる

山本 三 男 ☆ 群馬

どのように妻に言おうか迷いおり病院帰りの車の中で
平熱に戻り食欲のできたり考えることにも余裕ができぬ
電話にて病気を兄に話したりそれより少し気の楽になり
わが腰の袋を問わることもなく免許更新の実車を終える
気にかけて高齢者講習の二時間を咳しながらも無事に終えたり
かの日より通院通いが始まりてふた月ほどがたちまちに過ぐ
病弱な少年なりしわれなればもうガタの来る齢であろう

やや遠き道の駅まで車で来ソフトクリームを妻と食べおり

中村 哲也 宮城

見直せば夕方五時の雨予報三時に変わりて慌てて帰る
荷下ろしを業者終へたる瞬間に前触れ無きにザッと雨降る
サクランボ今年の配送去年よりぐつと少なく業者の嘆く
給水の管の腐食に漏水し階下に菓子折り持ち詫びに行く
曼殊沙華植ゑたるはずの鉢の上に蓬二株直ぐに伸びをり
道端に紫陽花見ては写真撮りウエザーニュースにリポート送る
イベントのチケット発売開始せる午前零時に回線込み合ふ
仙台のあぢさゐ寺の異名有る北山資福寺今年も行かず

昭和十九年の会アンソロジー
『モンキートレインに乗って ファイナル』
イナル』を読もう

桜井美保子



昭和十九年申年生れの歌人が結社という枠
を超えて活動しようと決まったのは記録によ
ると昭和五十四年。以来四十五年の長きに渡っ
て活動が続けられた。巻末の活動記録一覧を
見ると、その活動の充実ぶりが感じられる。

『モンキートレインに乗って』が最初に発
行されたのは昭和五十八年。その後も四冊が発
行され、今回はその六冊目とのことである。
歌集名に「ファイナル」とあり本集が最終の
発行と聞いているが、機会あればこの会のア
ンソロジーを発行してもらいたいような気も

している。メンバーの方々の個性ある作品に
今をどう生きるのかが伝わり、読者も自然に
力をもらえるからだ。

今回の合同歌集に参加しているのは三十八
名。歌壇で活躍中の方々と所属結社で重要な
役割を担っておられる方々も多い。ずらりと
並ぶ作品には、それぞれの独特の世界があり、
圧倒される。短歌三十首とエッセイ二ページ
という構成である。エッセイもじっくり読む
と、作者の生き方や考え、息遣いが感じられ
るほどに素晴らしい。会の活動が始まった頃

は三十代半ばだった会員の方々も今は八十歳を迎えている。そのことだけでも感慨深いことである。本集を手にとってみたい読者のために、収録作品のうちから幾つかあげて本集の魅力の一端を紹介できればと思う。

仕事ゆえ数多の歌人に会いしかど春日井建の笑み忘れ難かり 晋樹隆彦

抑留の日々を詠ひし父の歌 なつかしみ 読む雪降る朝に 林田恒浩

補聴器が聞き取る物は機器の音生きもその声川土手に聞く 御供平佑

編集ワークに五十七年も取り組んできた晋樹氏は十九年の会の発起人のお一人だ。インタビューで知った春日井建の優しさを詠む。林田氏は幼い頃、終戦の年に生地の大樺太から母と引き揚げた。父は捕えられ四年間も抑留された。歌には父への思いが溢れている。御供氏の歌からは、補聴器の試聴をしている状況が窺われる。機器が拾う様々な音に新しい世界が広がる。

飛鳥仏いいですねえと気が合ひて館をと
もなひくるる半時 小橋美沙世
今しばしこの世の事は捨て置きと雲は言
ふなり窓近く来て 竹安隆代
月いちど書かねばならぬ原稿は映画と短

歌をめぐる小文

丹波真人

それぞれ心のうちを詠んでいて面白い。小橋氏は奈良の旅の歌、国立奈良博物館で学芸員とのちょっとした交流も旅がもたらす至福。竹安氏は自身の入院生活を詠む。つまりこの窓は病室の窓である。病気の時は他の心配はせずゆっくり休めと雲は言っているのだろう。丹波氏の映画と短歌をコラボさせた文章は楽しく、多くの人に親しまれている。「書かねばならぬ」ものがあることが前進するエネルギーになっているのかもしれない。

雨と晴れ兼用の傘大きくてけふは真夏の陽を食ひ止める 小林芳枝

小誌選者の小林氏は平成二年入会。『モンキートレーンに乗って』は今回が四回目の参加という。頼り甲斐のある晴雨兼用傘。「食ひ止める」が絶妙。

猫の声無きをいぶかる電話の相手いつも
電話の邪魔をしたりき 鶴岡美代子
教材の原稿依頼を病魔にも負けず成し遂げし夫はあっぱれ 沢木奈津子

返すすべもうなくなりし赤き傘たたみて
そのまま悦ちゃんの傘 佐藤孝子
鶴岡氏の猫は嘗て電話中に纏わって鳴き声をあげていた。猫はもう居ないのかもしれない

い。相手の言葉に作者の心も揺れる。沢木氏は亡き夫を詠む。長くはない命と知った夫は最後の力を振り絞って仕事を成し遂げた。「あっぱれ」という言葉に夫への愛情が籠っている。佐藤氏は十九年の会で一緒だった伊東悦子氏を偲んだ。親しみが籠った表現に深い悲しみがある。

ほこりぐさ、メヒシバ、かたばみみな地道 雨後の大地にへばりつきつつ 古谷智子

野原や空き地に生えているこれらの植物は人間から余り注目されない存在なのだろうが、作者は温かい視線を注いでいる。地道に生きるものには粘り強さがある。

も少しの道を歩幅の違へども歩かうね一歩づつ歩かうね 松谷東一郎

一連に添えられたエッセイには九十歳までは健康で行動したいとフィットネスクラブに通っているとあった。一首は背骨の手術をした妻への言葉。穏やかで優しく響く調べである。さて、ここまでの紹介は本集のごく一部である。ぜひ多くの冬雷の皆様にこの合同歌集に参加している三十八名の作品に親しんでいただきたいと願っている。

(ながらみ書房刊)

◆会員の皆様へ

新刊『モンキートレーンに乗ってファイナル』の購読をお薦めします。メールか葉書、電話で事務局小林芳枝氏にお申込みください。宛先は冬雷誌裏表紙に記載されています。

ご注文は送料とも三千円で受付しております。
(広報・桜井美保子)

七月集／残響集評

大山 敏夫

友の子の「家が来る」とぞ言ひてをり
組立てらるる積水ハウス 益坂順子
土台を造ってその上に大工が建ててゆく家というのも、次第に様相が変わって来ている。この歌のように、あらかじめ準備されたパーツをトラックで運んで来て一気に組み立てられるものも多い。ビル等もクレーンで上へ上へと積み上げられてゆくが、戸建ても同様になって、まさに「家が来る」なのだろう。

四国遍路行くとふ人が甕に飼ふメダカ

すくすく育ちてをりぬ

須藤紀子

特に四国の遍路などは、大昔には大変な覚悟を決めて出た様であるが、今はそんなこともないと聞く。この人がどのような背景を抱えての決意なのか、大事に飼っているというメダカは知っているのかもしれない。

四年振りにプールに入り水圧を強く感じつつウォーキングす 松居光子

運動不足を案じてプールでの水中歩行を再開したのだという。「水圧を強く」感じたというところに、作者の意志の反映が読み取れる。

原つばにサッカーボールを一人蹴る少年ちらつと我に視線を 大野 茜

結句が何か意味深である。眼と眼がばしつと合って、その後どうなったのかと想像させる。作者は少年の姿に昔日の自分を重ね、少年は遊び相手を求めたか。

真ん前に菜の花畑の広がれるセルフスタンドのレーンに入る 佐藤幸子

具体的な描写があるので、その場所が畑など多い郊外だと分かる。作者の行

動パターンも思わせて親しめるし、結句に何かしらの緊張感も籠っている。

稲作の八十八度の手間もなく米をいただく日ごと毎に 藤田夏見☆

かつて米作をしていたが今は購入し、知人からも貰ったりする「米」なのだろう。作る大変さを熟知するからの上の句だし、下の句の感謝なのかと思う。だがこの「いただく」は如何なものか。私自身、かつて短歌の文法の師と仰いだ岩田晋次先生から、強く叱声を賜った事があった。大山さん、いただくなんてやっていちゃいけません。「貰う」「賜う」で良いし、「食う」「食す」で良いんです。変な丁寧語は止めましょう。という教訓。

岬まで山は荒れ果て道狭く灯台跡は面影もなく 松崎みき子

この作者の描写力は素晴らしい。余計なことを抑え、単純化が効き余韻あり。菜の花のやうな明かりが消えかかりトタン屋根打つ淋しい雨音 松崎みき子
これは結句が言い過ぎ。「淋しい」はとことん押さえきらねばならない。

九月集

梶 尾 栄 子 兵庫

長き畔覆ひて咲けるたんぽぽの黄の帯延べるごとく光りて
爆音を響かせバイクの男行く上着の裾をはためかせつつ
警報級大雨とふ日もデイサービスの迎への車は老いを乗せゆく
この広きバラ公園に草を引く人の帽子の見えかくれして
種芋を二キロ植ゑたるジャガ薯の世話入らずにて十キロとなる
丸揚げの伊勢エビフライこの店の名物ならし箸重きまでの
生きて在る時のごとくに行先を仏壇に言ふ行つて来ますと
脱皮後のなほ威嚇するごとく大きく口開けてゐる蛇の白きぬけがら
姫路城広場に小屋建ち勘三郎の飛び散る汗を間近に見る幸

石 渡 静 夫☆ 茨城

たつぷりと雨に打たれて田の稲はしっかり根づいて緑増したり
梅雨晴れ間膝が泣くほど正座してアイロンかけるシャツ十三枚
さわさわと稲を吹く風爽やかに梅雨の晴れ間をわれウォーキング
四十度に迫る気温に予報士は冷房付けよ水分摂れと
梅雨空は何処へ行ったか連日の猛暑に何も手つかずにいる

パラパラと落ちてきた雨遠慮がち猛暑を凌ぐ雨にはならず
暑くとも時は刻々流れたり夕食作ろう辛いカレーを
梅雨空に薄日が差せばどこからか蝉の鳴き声控えめにして
海の日静かな朝に一匹の蛙鳴くなり浪花節のごと

佐 藤 幸 子 山形

朝日のなかで受粉するらし西瓜の花雌花にそつと雄花を添へる
渦巻の形残して燃え尽きぬ草引くわれを守りたるものは
今は見ぬ「タンガラ」といふ背負ひ籠縁に半輪の飛び出しのあり
堆肥など運びし「タンガラ」の荷下ろしは背負ひたるまま頭を下げて
「タンガラ」の丸き飛び出しは首元と背中あはひを守るアイディア
山の畑の里芋苗にも父母は「タンガラ」背負ひて堆肥運びき
土寄せのつちにまみれてガマガヘルのそり顔出すじやがいの畑
さみどりの植田の面も濃くなりて夫は草刈る六月下旬
芽の伸びた里芋苗をマルチングの畝に深々と植ゑて安堵す

鈴 木 計 子 東京

少年が小さきカーネーションの籠もちて乗り来ぬ明日は母の日
伸びやかな父の字いまして思ふ吾に足らざる線と思ひて
伸びやかな父の字几帳面な兄手本の姉の字われのお粗末
師の墓の住所を持ちて待ちあはす参りたいとふ級友をりて
十餘年ぶりの墓の師に言ひぬ「先生の歳に近づきました」

買ひそびれ苺シロップ作られず三十年餘つづけ来たるに
近づきて来る人器機に話しつつ幾度も頭下げて過ぎたり

中学校通れば聞こゆ「夏の思い出」鼻濁音ならもつとよいのに

吉岡松世 愛知

小さき花の岩だれ草に蛭蝶ひらひらと来て翅を閉ぢをり

母さんが読んでくれると幼言ふ『ほたるの墓』をしつかり持ちて

オレンジの南瓜の畑に生りだして現れさうなピーターラビット

蛙たちの大合唱にむかへられ蛍の灯る微笑むやうに

左耳いつまで拗ねる聞かせてよ鳥のさへづり風鈴の音

ひたすらに庭を覆ひて白き花咲く十葉に而今を思ふ

藤田英輔☆ 高知

横棒は水平に引かれ縦は斜の番号記号はシャープではない

珈琲の湯気に鬱となる朝八時四国山地は夏日に入りて

「回覧」はスマホに届く「訃報です」昼食の卓の上に震える

振花は日差しのなかより摘み取られ蛍光灯の下にビンに立つ

梅雨長くハウスに住まう甘とうもろこしと音する晴天待てり

齋鹿ミヤコ 神奈川

この椅子の高さならばと干すタオル風呂場の椅子は物干しとなり

できないと思ひてゐたる仰向けの姿勢のできつ見守られつつ

ひとことの希望とちから吸ひ込みて治療を受けつベッドの上に

あら嬉し主治医のはじめのこのことばへモグロビンの自力回復

半袖の肌うつくしき主治医なり齢を問へばこたへてくれたり

白湯と記せるペットボトルありコンビニエンスの売り場の棚に

弁当を運んでくれるといふチラシ頼んでみたり今日のお昼に

ブナの木の下で靴べらと言ひ持ちくるる友の土産のメイドインチャイナ

須藤藤紀子 埼玉

白鷺の二羽が寄り添ひ連れ立ちて低く飛び行く重き梅雨空

梅雨の日の今も水田に水無くて夾竹桃の赤の際立つ

風呂の窓に張り付くヤモリ今宵また獲物を待つか灯にくる虫を

亡き母の庭に咲きみし芍薬の今はあらずと気づく初夏

半身を湯にて洗へば寝たままの犬はぐうんと体を伸ばす

犬連れて川沿ひに見し蝮草あの草むらに今も潜むか

小嶋知葉☆ 茨城

庄巻の合同歌集手に届き編集の汗いかばかりかと

それぞれのエッセイも入りより深くはじめから読む丹念に読む

昨年のわが生き様のいとおしく合同歌集は宝物なり

うれしくもプロジェクトXに出現す戦時下の校舎「トモエ学園」

出演の黒柳徹子氏涙声「トモエがなかったら今はない」

猛暑日は家にこもりてゆつたりと童話に浸る新美南吉

「こんお前だったのか」読む度に涙の「ごんぎつね」またも読みたり

残響集

松崎 みき子 岩手

日照り続きかぼちやの葉焼け収穫はあきらめ根起こしする七月初め
亡き母の麦わら帽子この夏は日傘のやうにわれ被りをり
夕立のあとアルミ戸に跳ね付いた土を流しぬ雲は去りゆく
雨あがり手に乗る蛙小さくてレタス摘みあるわれを笑はす
膨らんだ蕾のままに根本から折れた黄の百合部屋に香りぬ
冷やし中華にわが畑より採れた野菜乗せて食べれば美味しさの増す

片桐 美穂子☆ 神奈川

給食で鯨を食べていたころはこれが文化とわかっておらず
夏休み開けると日焼け度くらべおり色白の我毎年勝てず
真夏でもかつては日射病のみを警戒していた麦わら帽子
高温の早朝に朝顔二輪咲く熱を集めたような紅色
やわらかな黄緑色の新芽出る挿し木されたるアジサイの枝
薄紅の日日草は涼やかに炎暑の日差し受け止めており
水平線猛暑でにじみ初島が空に浮いているような午後
伊豆山のふもとに黄色いシヨベルカー土石流跡まだ整わず

井出 裕子 静岡

前回は私の前にて完売となりたれば今日は早めに並ぶ
炎天下日傘も差さず若き子らスマホ片手に開店を待つ
私の前に並ぶは京都の人と言ふ順番待ちつつ話の弾む
若きらをからかひながらどら焼きを作る店主も名物なるらし
どら焼きを作りて続く四十年店主の指先リズムを奏で
焼きたてのまだ温かきどら焼きを一人居の友に届けに寄りぬ

金子 八重子☆ 千葉

花形の白い日傘の可愛くて鏡の前で閉じては開く
倍速で仕事をこなす同僚の終って一言「ゆっくりやろう」
たっぷりのおろし生姜に葱大葉これさえ有れば食欲の増す
赤い部分少し付いてるスイカの皮の浅漬けカリカリ夏は本番
日傘とスマホ二日連続忘れ来て暑さのせいにしたい歳なり
熱中症予防の為にウォーキング秋風吹くまで堂々休む
食レポの「うーんカリッとジューシイでもちっとフワフワ」一体どんな？

首藤 文江☆ 埼玉

今日こそは気になる死角の掃除をとこわごわ覗くテレビの裏側
知人から友になりつつある人の思わぬ訃報に呆然とする
虹の出る鉛色した夕空に明日は晴れると予報士の声
もしかとは思いますが声かける半年ぶりに出会う笑顔に

七月号作品二評

井上 萱子

明日からは連休に入るとふ退け時の人も車も弾みてゐたり
梶尾栄子
大型連休に入る前日の開放感や期待で、浮き立つ様子が「弾みて」ということばに強く表現。人間だけでなく、車も弾むと言い個性的な視点に詠む。

歩き方を理学療法士に教はりて桜はなびら浴びつつ散歩
三好規子
理学療法士に教わった歩き方はわからないが、体を良い方向に導く歩き方だろう。桜の花を浴びながらのところに、教わった通りに従い楽しむ余裕も見える。
ブラインド素人工事に付けかへて何か嬉しき厨の窓辺
小林貞子
ブラインドの付け替えは、本当は素人には難しいのだろう。それがうまく行った嬉しさが素直に伝わる。
ばあちゃん草むしりなどしないでと長男が言うから我慢をしてる
早乙女イチ☆
口語の軽い中に親子の情がきちんと詠

まれていて温かい。山崎方代氏の名歌といつも重ねて拝見している。

結婚相手を選ぶのは暗闇の中手ぐりりて人を掴むようなものかも
卯嶋貴子☆
「暗闇の中手ぐりりて 人を掴む」、全くこの通りですばらしい喩えと思った。手さぐりで掴んだ相手はどのような方だったのか、余計な想像をしたりして。山藤の新緑に溶け控へ目に時に逞し大和の花なり
山本述子

新緑の中に山藤の薄紫の花がたおやかに咲く風情は、正しく大和の花である。しかしながら、その蔓に絡まれた木は死滅するほど藤は逞しい。生態を詠む。
にこやかに筈笑まふ絵はがきを治療やめたる友に出したり
鈴木計子
治療は前作から抗癌剤治療のようだ。竹の子は一日で一メートルも伸びるとか。元気で成長の早い竹のように、快復を祈る気持の込もった励ましの一首。
わが蔭けるネモフィラ育ち咲く花壇蒼き色澄む朝の花群
児玉孝子☆
ネモフィラの群生は圧巻だが、一本一

本の苗はか弱く頼り無い。自分で蔭いて育った花群の感動が爽やかな下の句。

でかけよう晴れて風なくリハビリに歩いて銀行その後買物
安川敏子☆
晴れた日の気分の良さが、歩いて用足しに出掛けるところにあるが、銀行その後買物と具体的に述べて説得力がある。会ふことは遠く離れゐて叶はねど月づきの歌に知るその人のこと
西村邦子
これが結社誌の良いところ。会ったことがなくても歌に感動したり共鳴したり、古くからの知己のように思う。私も思う。

雀どち御免なさいねブルーベリーをネットに覆ふ熟れないうちに
江藤ひさ子
人間が食べるためのブルーベリーだから、雀に詫びることはないのだけれど、雀に一声かけるやさしさが心地よい。
襟を立てブローチさして隠したし隠したつものりの首の年齢
齋鹿ミヤコ
首は年齢の隠せないところ。いろいろな工夫して隠したつもりが、隠れていなかった。「隠したつもり」の効果が大き

七月号作品二評

江波戸愛子

散り敷ける桜はなびらの上を走るためらひつつも速度落として
梶尾栄子
散り敷く桜のはなびらはとてもうつくしい。いつもは避けて歩いているのだから車では避けられないときもある、下句にその時の心情がつたわる。

歩き方を理学療法士に教はりて桜はなびら浴びつつ散歩
三好規子
教わった歩き方で歩いているのだから。下の句にその効果を感じ、桜の花びらを浴びながら歩く作者の笑顔がうかぶ。
ブラインド素人工事に付けかへて何か嬉しき厨の窓辺
小林貞子
今まで業者さんに頼んできたことのひとつブラインドの付け替えを自身で出来た喜びを詠み厨に立つうれしさを詠む。その後も自身でいろいろなことに挑戦されているのではないだろうか。
花の中の小さなまるいミカンの実早く大きくなるの楽しみ
早乙女イチ☆

ご自宅のみかんの花の中の小さな実が育つ様子を楽しそうにみている作者の笑顔がかび読む側も笑顔になる。

原つばに白詰草が咲き満ちて孫に教へる冠と輪飾り
植松千恵子
花で冠や輪飾りの作り方を教える作者と教えてもらっているお孫さんの嬉しそうな顔がみえるようだ。お孫さんに向けて作者の眼差しが温かい。
手術後の兄が煮ている大納言見舞のわれとつくる牡丹餅
佐藤靖子
春彼岸なのだろうか、手術を終えて退院をしたお兄さんが煮た大納言で牡丹餅を二人でつくった、と詠んで兄と作者の仲の良さがよく判る、日ごろからご先祖様を大切にしているふたりなのだろう。

両膝の痛みに筋トレ始めたり週一通いで痛み軽減す
永野雅子☆
膝の痛みを言う人は意外と多い、この歌に筋肉をつけることがとても大事と教えてもらった。
竹の子を思はずやうに伸びてをり一ヶ

月前に会ひし女童

吉岡松世

すこし会わない間に背の伸びた女の子を竹の子のようにと詠んでその成長に驚きよろこぶ作者がうかぶ。

わが蔭けるネモフィラ育ち咲く花壇蒼き色澄む朝の花群
児玉孝子☆
育てたネモフィラの花が咲き毎朝みることのできる喜びを詠む。下の句に海浜公園のネモフィラの丘が浮かんだ。

「海くーん」と呼べば振り返る二歳児をパチリと一枚桜の土手に
野口秀子
前の方を歩く二歳児はげんきいっぱい男の子で好奇心もつよくなかなか言うことを聞いてくれないのだから、名前を呼んで振り返った瞬間を桜もいれてシャッターをきったと詠む。下の句のパチリと一枚の表現に惹かれた。

でかけよう晴れて風なくリハビリに歩いて銀行その後買物
安川敏子☆
初句の「でかけよう」に強い意志を感じる。歩くことが良いと言われているが、作者のように用を足しながら歩くのもリハビリのひとつで楽しみながら出来る。

七月号作品三評

桜井美保子

三日ぶり雨上がりたる家の前雀の声す
いつもの群れか 小田原禮子
雨の降っている間は雀達はやってこない。
ようやく雨が上がって雀達の声がした。「いつもの群れか」と詠み、常日頃の雀達への親しみが滲み出ている。

商売が新聞記者でも酒飲めず常に大盛り六十年前 新井光雄☆

若き新聞記者として活躍した六十年前のこと。様々な情報を得るためには付き合いが大事で、飲める方が良かったのかもしれない。飲めない作者のご飯はいつも大盛り。「体重史」という連作のタイトルもユニーク。勢いのある歌が魅力。
娘二人に迷惑かけぬを念頭に自ら移りぬ望まぬ施設へ 佐々木政子
自宅での一人暮らしを考えての決断だったのだらう。結句に複雑な思いが吐露された一首。施設に住めば多くのスタッフや居住者との交流もある。前向きに気持ち

を切り替えて明るく生きましよう。
桜花の一斉に咲き膨らみて里の空間狭くなりたり 井上鈴子
確かに桜の花が満開になった時などはその膨らみを感じる。常なら広々と感じる里の風景も花が咲いたことで、桜が占める空間が広がり里全体の空間は狭くなったように見えるのだ。

水俣病の患者らと国の懇親会溢るる思ひもマイク切られぬ 井出裕子

水俣病患者らの団体の方が一生懸命発言している最中、マイクを切るなどは許されることではない。国という立場にいる人間がなぜこのような行動をするのだろうか。作者の思いに共感。

カモシカとつばさ衝突のニュースあり

カモシカの怪我何も報じず 羽田孝輝
山形新幹線とカモシカの衝突。乗客が無事か、車体に被害はないのかなどは伝えてもらいたいが、動物のことも思い遣って欲しい。作者の気持が分かる歌。風の中枝垂桜が頬打つと和音気にかけて声張り上げて 立石節子☆

七月号作品三評

橘 美千代

カンパニユラ風鈴に似る花一本売れ残りレジ籠に入る 小田原禮子
カンパニユラはキキョウ科ホタルブクロ属の鑑賞用植物の総称でラテン語の釣り鐘に由来する。ピアノ曲「ラ・カンパネラ」に似た響きに惹かれた。売れ残っていたのを作者は目に留めレジ籠に入れた。流れるような動作が目に見えかぶ。

娘二人に迷惑かけぬを念頭に自ら移りぬ望まぬ施設へ 佐々木政子

互いを思い遣る家族間の情愛が偲ばれて切ない。娘のために身を引くという。下の句に作者の決意が込められている。

突然に息子は蕨の戻し方教へてと言ふまづ蕨採りす 井上鈴子

息子さんは、兄を亡くし沈みがちな母を見ていて元気づけようとされたのだらう。作者に教えを乞うことで。試みは成功した。結句に活力が漲っている。

水俣病の患者らと国の懇親会溢るる思

ひもマイク切られぬ 井出裕子

今年五月一日の水俣病患者・被害者団体と伊藤信太郎環境相との懇談会の際、被害者側の発言中に環境省側が意図的にマイクを切って妨害した。筆者も環境省の対応には呆れ果て憤りを覚えた。被害者救済など他人事なのか。謝罪も批判を浴びて渋々といった感じだ。新潟県にも新潟水俣病が発生した。昭和電工がメチル水銀を含有する排水を阿賀野川に流したためだ。有明海の水俣病がすでに発生していたにも関わらず防げなかった。環境省一同は石牟礼道子の『苦海浄土』を読み民衆の苦しみを知れと言いたい。

カモシカとつばさ衝突のニュースあり

カモシカの怪我何も報じず 羽田孝輝
山形新幹線つばさは福島で東北新幹線やまびこからの連結を外れ西へ山間部を平野を抜けて米沢へ向かう。筆者もニュースで列車や車に衝突と聞いたたびカモシカやクマはどうなったかが気になっならない。新幹線つばさと衝突ならさぞ。悩み事解決せねばんやりと笑いの番

気の合う仲間と歌を歌う。それぞれの受け持ちのパートがあつてその和音を合わせながらのコーラスか。桜ふぶきの頃の楽しい集まりのひと時を詠んでいる。

我が畑の野菜届けし食堂に子等の絵手紙笑顔届けぬ 越澤太朗☆

美味しい野菜は料理する人にとってもそれを食べる子供達にとっても嬉しいものだ。子供達の絵手紙と笑顔に日々の農業の苦勞も報われるだらう。

コロナ下で作ったジグソーパズルにはステイホームの記憶とどまり 片桐美穂子☆

今では忘れかけているコロナ下でのステイホーム。手作りのジグソーパズルがその時、どんなに心を慰めたのだろうか。そのパズルにはコロナに脅かされた日々の記憶が刻まれている。

バス窓の車と違う目の高さ植物達が新鮮に見ゆ 永井亨子☆

バスは車体が高いから普通の車に乗っている時と比べて窓から見える樹木や花や草など見え方が違う。小さな発見だ。

組音消して眺む 金子八重子☆

笑いは脳を活性化し免疫能を高める効果がある。そんなお笑い番組を見てはいるが「ぼんやりと」や「音消して」に作者の悩み事の深刻さがうかがわれる。

シュレツダーより有効な秘密処理紙を溶解させて葬る 片桐美穂子☆

シュレツダーに書類を入れて一気に細断するのは爽快であるが、それを上回る処理法があると。溶解だ。痕跡すら残さずに葬り去る。凄みある表現だ。

シルバーバス初めて使うオドオドとバス待つ人に教えてもらう 永井亨子☆

車の運転を止められたようだ。初めてシルバーバスを購入されたのだらう。勝手がわからず「オドオドと」戸惑う様子が素直に詠まれていて好感が持てる。

頂上へあとひといきと急傾斜をロープ伝ひに登り続ける 岩村知康

力強い歌いぶりだ。頂上まであとひといきの急傾斜を王手をかけるように登りゆく。ロープ伝いに一歩一歩。作者の昂ぶりとはずむ呼吸までも伝わるようだ。

作品二

小林 芳枝 東京

「まだ若い」と言はれてきたる七十代さいこの日まで後一カ月
四日まへ早朝に聞きし蟬のこゑ短く過ぎてそれより鳴かず
一人には余る煮物を孫の来て持ち帰り呉るありがたきかな
エアコンの風に鳥肌立つことのありて気怠し朝はことさら
パソコンの画面を過る虫ひとつコバへよきみと共生できぬ
部屋の内には確かに生きてゐる筈のコバへを探す息を潜めて
「狸蠅俗名コバへ」素早くてちひさな虫は今われの的

本間 志津子 山形

天翔る獅子の姿の雲一つ残り夕空晴れ渡りゆく
こんなにも多かつたのか休耕田庄内平野の早苗田育つ
はらはらと南天の白き小花散り赤き実のなる冬思はしむ
続柄「姉」と幾度書いただらう入院をなす妹のため
回復の早からざるは加齢ゆゑと医師は言ひたり暑き日続く
すべもなく口を閉ざせば浮かび来て千切れ千切れの過去が苛む
雨雲の過ぐる速さよ風強く梅雨入り三日目空重々し

音たてて道路を叩く雨激し大雨警報発令の朝

皇室が王室を訪ふ番組を横目に物を干す五月晴れ

益坂 順子 福岡

再びの福智山行く顔ぶれと季節かはりて感動新た
三十年前に求めしルーベ使ひ故宮の旅を思ひ出しをり
遠征の訓練といふ誘ひ受け県内一、二の高峰目指す
釈迦像の安置されたる頂に友の操るドローン飛びゆく
真上よりドローンの映す山やまと峰を重ねて眺むる眼
エゴの花散りしく尾根に心地よき風を受けつつ足運びゆく
寒葵の伸びたる大きな葉の陰に控へめに咲く暗き紫
四時間の縦走コースのひとつところ八ッ滝ありてタオルを濡らす

小林 貞子 山形

雀の巢ひな諸共に蹴落として鴨直ぐに己が巢を架く
蕨野のとがりすもの細き木に実の色付けど猿は素通り
草刈機止めて山畑静まれば去れと言ふがに老鶯のケキヨ
薔薇の木を植ゑし時在り忽ちに大きき毛虫が集りて枯れし
薄紙のごと淡淡と月白し葵の花の咲き群るる上
晴れ間みて挽ぐ梅の実は粒重く葉群の中に黄ばみて明し
白道の二つの謂れ胸に置き尚も惹かるる月を詠む歌
「常冬」と吉川英治氏言ふ打ち続く天変地異と戦争の世を

七月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

禍根はこれかと思ふ塊を夜ごと採み解
し不眠やはらぐ 大山敏夫
なに一つ誇れるものの無き者に楽しみ
一つみじかうたあり 赤羽佳年
繰り返し店主は岩手の鰯をと美味を述
べつつ鰯を捌く 黒田江美子
馬鈴薯の蕾の膨らみ紫の花弁が畑の一
角を染む 中村晴美
窓側の和服の人の読む雑誌三十一文字
が頁にならぶ 山口 嵩
人の手に矯正されたる藤の花ひと群が
れり蜂の如くに（平等院藤棚）天野克彦
降りしきる雨に形を崩しゆく牡丹の蕊
の黄の際立ちて 高橋説子
蒲公英の花に舞ひ降り蜜を吸ひ羽震は
する蝶の悦楽 嶋田正之
水草にかかれる白きもの見えて上流の
花ちり初むるらし 稲田正康
渡り鳥まてるサシバのごと潜む巡回警
備車きづかぬふりす 姉川素枝子

七月号 十首選

七月集／残響集 山口 嵩

お茶と菓子こめ一キロの参加賞はるの
ひと日のファミリウオーク 益坂順子
ホーホーと梟の声二度三度応ふる声の
なき春の宵 須藤紀子
これ以上足腰の衰へ進まぬやう水中歩
行を励みてゆかむ 松居光子
白蝶は今日もふらりと我が庭に誰の化
身か足元に寄る 川上美智子☆
八寸にレモンの苗木育ちみて初生り四
つ冬の陽の中 大野 茜
わが鎌の先に顔出す青蜥蜴虹色尻尾を
くねらせて消ゆ 佐藤幸子
そこちの若葉を揺らし風の来る枇杷
の木陰にひとやすみする 藤田夏見☆
爽やかなハーブミントの香りくるわれ
の花壇の外れの風に 松崎みき子
墓清め香華を供へ亡き夫に法要つとむ
と語りかけた 水澤タカ子
朝方に淡雪となり積もりそむ午後の会
合不安がつる 後藤恭介☆

佐藤靖子 東京

ハム買ふにけふは日本ハムにする頑張つてゐる新庄日ハム
猫の世話こまごまとしてそのうへに鳴けばしばらくそばに居るのみ
HBを使はずなりて久しかるおほかた4Bときに8B
陰謀につぐ陰謀に読みつかれ結末の吉さきに知りおく
出身地聞かれていつも言ひよどむ生地は父の転勤先にて
容赦なく日の照るしたを吾ながら元気に歩く眼鏡を買ひに
眠るべく眼つむればまなうらに両目がじつとわれを見てゐる

山本述子 神奈川

波静か白きタンカーすべりをり湾入口の浦賀水道
押し寄せる波に心を預けをり海岸散歩朝一番に
「おはよう」に「行つてきます」と返しくる児ら渡る脇に白き浜木綿
シニア会の七夕に向け「転ばない」「寝たきり御免」の短冊吊す
声出しも大切なりと入会す童謡・唱歌の「ミュージックスクール」
各農家自慢の西瓜並べをり微妙に違ふ甘さ楽しむ
炎天下グラウンドゴルフの練習は視界遮る汗の滴る

藤田夏見☆ 広島

目の大きなてるて坊主を軒下に吊るしておきぬわれの生まれ日
曇天の夏至の日曜孫達と讃岐路を行くサーフィン日和
条件は二十五メートル泳ぐことサーフィン服は男物S

七月号 十首選

作品一 石渡 静夫

庭に咲くミモザの色の上着着て今日の
会議の扉開けたり 田端五百子
右手萎えて左手に箸を持つ友の茶碗に
いつばい飯のつきめて 野村麗子
背を丸め散歩の翁気になれど我れは背
筋を伸ばし歩まむ 斉藤トミ子☆
模写とは思いの外に難しくまったく同
じに描くだけなのに 浜田はるみ☆
同居する次男は中華の御馳走と一緒に
食べようと食卓に並ぶ 樗木紀子☆
まだ青き枇杷の実日毎ふくらみて五月
の風が心地良き晴れ 林美智子☆
ロボットの茶を受け取れば背を向けて
テーブル避けつつ帰り行きたり
長尾弘子☆
花のあと公園の大本は輝きて池にこい
のぼり十七本渡る 伊澤直子☆
運転中気づかなかった自転車道の道が一
番貧しきを知る 乾 義江☆
タケノコを掘るは易しく皮むきは忍耐
力を試される時間 吉田佐好子☆

七月号 十首選

作品二 大塚 亮子

玄関のチャイムは鳴るもなかなか待
つてましたといかぬこの頃 梶尾栄子
突然に空の面積狭くなる新築工事の足
場組まれて 石渡静夫☆
夏櫛の挿し木に小き花二つ見逃しさう
な微かな白さ 小林貞子
傘をさし指折りながら横切りぬもしや
歌詠む人やもしれぬ 東 ミチ
原つばに白詰草が咲き満ちて孫に教へ
る冠と輪飾り 植松千恵子
移り来て桜もみちを二十年重ね来たれ
ばここが我が街 松本英夫
両膝の痛みに筋トレ始めたたり週一通い
で痛み軽減す 永野雅子☆
わが蒔けるネモフィラ育ち咲く花壇蒼
き色澄む朝の花群 児玉孝子☆
竹の子を思はすやうに伸びてをり一ヶ
月前に会ひし女童 吉岡松世
「重いぞ」と一升餅は粒立ちて齢一つ
の児の背に乗りぬ 藤田英輔☆

右足のサーフボードに繋がるる羊水の中のへその緒のごと
遠浅の太平洋の固き砂踏み締めボードを持つ身は軽し
波を読みサボートする手の押しくれるボードの走る岸まで走る
鈍色の大海原より繰り出せる波に乗りいるボードにわれは
立つことも正座も出来ぬサーフィンにひととき遊ぶ海鳴りの中

東 ミチ 青森

全身の節々すべてが病む思い今朝の一步に激痛はしる
正常な体の形を保てずに両膝くの字によりちよち歩く
両膝に注入するヒアルロンサン五本目なり効き目を問はれて我はうつむく
治したい其の一心で鍼灸に更にマッサージ師に手当を受けぬ
アボカドが膝関節に効くとありすでに四十日毎朝食べる
茶碗むしに残るユリ根を植ゑたればすくすく育ち蕾を十個
庭眺む膝を治して今年の秋に思ひ出の木を地植ゑせねばと
三年前ブツリ切りしノウゼンカヅラ前より増して枝葉揺らせり

三 好規子 神奈川

ネモフィラを硝子の瓶の薔薇に添へ挿せば一週間つぎつぎ笑ふ
丘一面ネモフィラの画面わが家の瓶のその花劣らず美し
大学生の孫より届く葵祭の動画五階の部屋より撮りて
平安時代の装束まとひ馬や牛の行列つづく五階よりの映像
牛車の音たかく軋みて輿に乗る人や傘下の姿は見えず

栗のはな匂ふほとりの柿若葉ひかりつつ抱く小き粒の実
梅林の傍の道には車にて潰れたる実のそここにあり

早乙女 イ チ ☆ 栃木

丸々と青葉の中にみえているピンポン玉ぐらいのミカン重そう
楽しみに茄子を三本植えたればふつくとした長茄子が生る
これからも毎日茄子が生るのかとぎるもちながら嬉しくなった
生き生きと葉がのびてきた茗荷苗さがして見れば茗荷が一つ

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

今年二度目の緊急入院した夫は足の手術をせずに退院す
病院の面会はゆるくなりマスクして面会申込用紙のみとなる
ジリジリと太陽浴びて猛暑日に歯医者へいそぐ自転車に乗り
一生に自分の知ること限りあり他人の知識は計り知れねど

植 松 千恵子 静岡

巢立鳥は巢の中で二、三度羽ひろげ真つすぐ飛び立つ仲間には合はむ
通学のリュックにゆれるマスコット好みの写真も何でもつけて
道端に播かれたでもなくポピー咲く外来種にて強い花
田を植える昔は総出で今一人機械に乗りてスルスル進む
コシアブラさりと揚げて蕎麦に添へタラの芽のあり珍しき菜
ミモザの黄山吹の黄たんぽぽの黄終れば夏山に白の花咲く
アルマイトの片手の鍋は畑にて肥料撒くのに軽くて便利

加 藤 富 子 ☆ 栃木

山法師は滝のように枝垂れ咲く主不在の草叢の庭
雨のない梅雨だと言うが庭の木々勝手放題に枝葉を伸ばす
天候の不順さ故にさくらんぼ高価となりても友より届く
冷房は程良く効いて心地良く生の演奏弦楽四重奏聞く
知らぬ間に孫の成長著しキッチンに並び「ババの背越えたよ」
冬雷の作品年鑑手にとれば去年のあれこれキラキラ戻る

川 上 美智子 ☆ 高知

良く通る風爽やかな高台の友の住まいは見晴らしの良し
向かい合う小高き山の裾に見ゆるインターチェンジに車はまばら
香り良く京ちゃんの淹れる拘りのコーヒーマー一杯ほっとする味
「ちゃん」を付け呼び合えるのは同郷の幼友達僅か三人

「みっちゃん」と呼ばれて浮かぶ祖父母等の優しき眼差し懐かしくなる

恒例の一斉清掃町内の人等出揃う六月第一日曜の朝

近隣の人等は並べて高齢者屈む作業に足腰痛む

高齢者の様子見回り軽々とグレーチング外す若き班長

川 俣 美治子 ☆ 栃木

風なくも沙羅の花一つゆらゆらと一匹の蜂が蜜吸い揺らす
長いこと使い古した温度計グングン上がる赤い液体
葉の蔭でオクラは立ちて成長す採り時わからず今日も見ている

七月号 十首選

作品 三 天野 克彦

三日ぶり雨上がりたる家の前雀の声す
いつもの群れか 小田原禮子
いかやうに国はあれども桜咲く先づは
花見と友誘ひ呉る 佐々木政子
みどりの日息子の車快走す真つ白な
「月山」間近に見つ 奥山清子
消炭の中にくべたる焼き芋の香りと母
の背なか懐かし 山崎 猛 ☆
初鰹の便りあるたび思い出す届けくれ
にし那珂湊の叔父を 塚本節子 ☆
あつてなく友逝く知らせ不安なるゆら
めく心鎮められぬ夜 笠岡文子 ☆
綿雲のゆっくり流れ行く先は見定めぬ
まま畑に休む 越澤太朗 ☆
部屋中に荷ご飯の匂いして風に誘われ
外に漂う 首藤文江 ☆
車より電車やバスが気が楽で景色を楽
しむ心のゆとり 永井享子 ☆
見はるかす港も低き山々も初夏の光に
かぎりひてをり 岩村知康

歌集 / 歌書
御礼

編集室・佐藤靖子

■鈴木茂子歌集
『壁の折り雛』

令和六年三月二十八日発行、二一八
首を収めた第一歌集。宮城県白石市の
鎌先温泉郷に代代の土産物店を継ぐ暮
らし、本家は「すゞきや旅館」を営業
中という。周囲のことを淡淡と表現す
る行間には街の賑わいや地域の結束の
ようなものが漂う。結社「心象」と、
その後の「パレット」に所属する著者
が短歌を始めたのは東日本大震災の一
年ほど後から。ではその一部分から。
電線の下に居るなと叫ぶ声 見上
げて気づく我らのことぞ
絶え間なく襲う余震のおそろしさ
二階より毛布おろせずに居る
地震の後水量増したる湧水が竹藪
のなか山葵茂らす
姑の歌からは信頼しあう関係が気持
ちよく伝わってくる。

朝の庭の水撒き終った夫の手に赤く溢れるミニトマトの山
いただきます気がつけば皆冷たきものあったかご飯にほっとする夕げ
キンキンに冷したきゅうり一本に味噌つけ食せば夏の音する
汗流しそうめん吸る音が良い暑さも湿気も下がる気のする

津軽

松本 英夫 東京

機の下に肩を寄せあふ村一つ能代の奥の山の狭間に
大館の桜の少し残りをいかに咲くらむ弘前城は
雪をのせ裾野ひろがる岩木山忽然と見え胸高まれり

ああ、やはりソメイヨシノは飛花落花しだれのそよぐ弘前公園
老夫婦ゆつたり作る津軽そばいわしの焼き出汁染むやはき蕎麦
シヨッピングセンター賑はひ駅前にはシャッター並ぶ鷹ノ巣の町
飛び入りで太鼓叩けば若者とだんだんだんひびき合ひたり（津軽藩ねぶた村）
三味線をバチのたたけば左手のくきくき踊る津軽じよんがら節

二ヶ月続きの茶会

永野 雅子 ☆ 東京

護国寺の茶会に新調の単衣着る夏帯締めれば涼やかな色
大学の茶道部と合同の茶会なれば若き生徒の多く見られる
クーラーのある茶席は涼しけれど待合廊下はかなりの暑さ
床の間に桔梗を飾り菓子に螢涼しさと共に季節を演出す
奥深き場所に位置する「楓の間」に席札抱え客を案内す
前回の茶会から約一ヶ月点前も運びも身体が動く

大野 茜 神奈川

一茎に七つの花房フリージアそつと顔寄せ甘き香を吸ふ
絵になると残したる甘夏十三個花咲き初めて慌てて収穫す
妻の贈りし真紅のバラのブリザーブに卒寿の方の元氣な電話
足指の魚の目痛いと泣く妻が医院で切開跳ねつつ帰りぬ
古行李に赴任の私の荷をまとめ駅より送りし若き日の母
居酒屋の連なる横浜野毛の街静まる午後の細道歩く
気にせず雑草困ると引きたるに可哀想だと一瞬よぎる

児玉 孝子 ☆ 愛知

雨間みて畑に来ればトマト熟れそつと挽ぎたり初物十二個
シューズ欲しと息子に頼み訪う店に二足選ぶを買って呉れたり
玉葱の収穫すませ間を置かずいも蔓四十本耕して挿す
夏野菜に程よきお湿りいただきて胡瓜茄子ピーマン収穫の朝
夫の遺骨東本願寺に納骨す子等と揃いて御堂に焼香す
蘆山寺に入れば美し源氏庭紫式部桔梗に偲ぶ

この旅にはずみ過ぎたか左足ひどく痛むに掛り付けに行く
車椅子に乗せられ整形外科に入る信じがたき娘に押され

松居 光子 三重

贈り物のカタログ繰りて美味しさうなグルメの写真に目を奪はるる
実用性のある物よりも高級感のする品の方が喜ばれるか

寝た切りになるはご免とわが姑は
骨折の腰必死にリハビリす
日に数度世話をしたりし刻くれば
亡き姑の部屋へと足おのず向く
亡き姑の好物奈良漬買ってきてお
供えをする抹茶もたてて
環境を思わせる歌。

専業の出回る時節店におけば好み
て求めゆきし板長思わる
手上ぐれば何処でもバスは止まる
よと田舎ならではのことお客に教
う

こころばえ楽しい著者。

いろづきて赤うつくし柿の葉を
器がわりに大福を載す

ゴッホの「刈り入れ」の鎌おもし
ろし 湾曲長く所作などおもう
少しずつ人降りてゆき空席へピル
のあなたの夕日が座る

集中の奈良漬のくだりを読み、買物
の済んでいたその日、奈良漬だけ買い
に行った。

表題の『壁の折り雛』の雛は姑が壁
に飾っていたものである。

（本阿弥書店刊）

■豊田純子歌集『春蘭丘』

はるたくるおか

令和六年四月六日、三七四首の第三
歌集。（他に合同歌集『奥澤』。学生
時代に授業を五味保義に師事し、その
流れでか、「アララギ」に所属、その
後小市巳世司の立ちあげた「青南」の
古参会員となる。題名の春蘭丘はいか
にも華やかな印象があるが、みだしの
春蘭丘を読み始めて、ここが集の灸所
であるとすぐ分かった。老夫婦二人の
息女が亡くなったのだ。自分を責めず
にいられない苦しさにあふれている。
全体としても師や友の死、結社の終
焉など、親しんで自分の力となってい
た関係のことが剥がれてゆく悲しみ
が、ひとごとではないのである。

古くなるのは人ばかりではない。

辛口一献幹に根方に注ぎたり老木
の棕櫚を伐るこの朝。

夕つ日はしばしたゆたふ新しき或
いは古き屋根屋根染めて

厄介者と己が身嘆く姑なりき姑の
心に添へざりしか吾

迷ひつつ有名料理店の惣菜を中元に選り申し込みをす
補聴器のメンテナンスに訪れて抽選会のくじを引きたり
指示通りタブレットの画面をタップして三角くじの当たりの決まる
箱に手を入れてかき混ぜ三角の紙を選びし籤のなつかし
調整されたる補聴器つけて四等の石鹼もらひ店を出でたり

安 川 敏 子 ☆ 埼玉

昨夜から鍋にふやける金時豆甘すぎない様匙加減する
シヨベルカー朝からドドツと入りこみ奥の空地の雑草もぎ取る
七夕の笹の葉作りと短冊に願ひ事書く脳トレ時間
亡き友の自宅に招かれ葬儀以来の思いを込めて遺影に語る
親亡くし只一人にて家守る亜紀子さんの心遣い嬉しく
猛暑なの三十五度越えつづく日々外出禁止と娘に念押される
人間を恐れ拒否する保護猫に信頼関係築く人あり

西 村 邦 子 兵庫

学年の百メートル走決勝の孫は僅差の二位でゴールす
男の孫は誰に似たのか足早く長い足を大きく踏み出す
体育会に開放されたる食堂に孫の学校生活垣間みる
体育会「頑張つてたね」とメッセージ送れば孫から「ペコリ」の絵文字
テブルの鉢の金魚の一匹はまあるく周りを大きく寄りくる
短冊に願ひごとは書かねども今宵は七夕星空見上ぐ

ほの暗い木立の下にドクダミの白き花が群れて咲きをり
年どしに作りくれたる化粧水夫は花咲くドクダミ摘みて

野 口 秀 子 山形

冷房の介護タクシーに同乗し車椅子の夫の手を腕を擦る
転院先の入院手続き虚しかり事務的対応の書類の数多
ベッドに臥す夫の面輪の穏やかに動く手足を摩りて帰る
早緑の苗なびきある田んぼ道車走らせ心を放つ

「おばちゃん、若い」姪の一言に心浮き帰る車中に鼻歌うたふ
サーカスに象を見し日の遙かにて父に連れられ姉兄弟と我
わが歌の思ひを深く評されるを読めばじわりと涙の滲む
花好きな百合子さんと写メールす今朝咲くピンクのサボテン二つ

江 藤 ひさ子 大分

インドアもバスケットシューズも無き戦後裸足でコートを走り廻りき
裸足にて籠球したりき第三回の国体出場思ふしぼしば
体力も智力も劣化その速度計り知れずも都度都度妥協
橙赤色のやぶくわんざうと緋紅色のモンブレチアが庭に盛りつ
ひとり生えのトマトが日々色付きつ収穫のとき楽しみて待つ
烏どち急降下して色付きたるトマトをつつくその一瞬
ああ早くネットを張れば良かったと悔やむも詮無し鳥の先手
手をたたき追ふこともせずトマト食む鳥見てゐるその暫く

組板は軽く土鍋は小さくせむ守り
てゆかなこの老いの身を
包丁を鉛筆を持てるを良しとせむ
右肩に水たまりし吾が身
清水房雄氏のこと。

やうやくに分かりし吾か「言語化
されたものはフィクション」と君
の説けるを

連れ立ちて古書店めぐりし日のあ
りき「悦子嬢」と吾が娘を呼び給
ひ

右の「悦びの子」悦子さん悲歌。

西瓜ジュース両手に持ちて小走り
に來る汝病むとはつゆ知らざりき
もうぬないぬないものはぬないの
ですつばやきめぐる春蘭丘

今宵より眠剤オレンジ色に替へ逢
はむよ夢の中に娘と

娘がいつ來るか庭に残しておく茗
荷、待つうちに枯れてしまった茗荷の
歌があたにかい詩となつて読後に残つ
た。
(現代短歌社刊)

■吉野幸江歌集『越辺川のほとり』
令和六年五月十五日発行、四六二首

の第一歌集。越辺川はアイヌ語でおつ
pegがわと読み、豊かな川の意。土地に
どつしり構えて暮らす人の歌からは、
物であつたり人や地域との関わりで
あつたり、本人が体を動かして得る豊
かな内容が伝わってくる。

では越辺川のほとりを描く歌から。

風薫る越辺川に孫と子と夫は背
を並め釣糸を垂る

用水の奏づるがごと流れあて水張
田広く青空の映ゆ

葦切の「恋の季」かも鳴き立つは
葉の伸び初むる越辺葦原

騒めける川面見やれば群れ泳ぐ
石斑魚のをりて産卵近し

お姑さんは九十八歳で亡くなり同年
御主人は癌で逝かれた。

「嗚呼みんなどこかへ行つてしまつ
た」と朝ごと嘆く九十六の姑

かたくなにショートステイを拒む
姑理由のあるやも駄目だめと言ふ
SLを喜び釣を楽しんだ夫、告知よ
り二カ月、頑張つて生きられた。

告知の後十日を並び寝ぬる夫一人
で寝よと氣遣ひくるる

作品三

がざ・あうしゅびつつ

新井 光 雄 ☆ 東京

プロッホの作曲となる一曲の「ヘブライ狂詩曲」ガザを想いつ
CDを一枚偶然とり出だすにユダヤ人プロッホ聴けというごと
凄惨なアウシュビッツを思い出すイスラエル軍ガザに今何を
アウシュビッツ訪れし時拾いたる落葉の二葉いまも手元に
友ヨセは私の知りたる唯一のユダヤ人なりいま何おもうや
ヨセの親二人そろって拉致されてアウシュビッツに殺されたと聞く
東洋の片すみにいて間の抜けた老いを生きる身何を為すべき
ただ非難それだけはすまい日本人アジアで戦前何を為したか

小田原 禮 子 福岡

七月の二日になりて暦剥ぐ能登の地揺れて半年過ぎぬ
かけ放すラジオ講座はポルトガル語かシブサワとツダキタサトは解りぬ
独り居の昼餉の皿に柚子大根残りゐて蛇口の水が流しぬ
記録的暑さの今日は唐突にまな板と鏡磨いてみたり
線状の降水帯の東へと映る画面に地球儀思ふ

水 澤 タカ子 山形

池の端の皐月はいのちいつばいの花咲かせをり引き寄せらるる
咲き分けの皐月は遅れ咲き出だす冬椿の根元に目覚めたるごと
松が枝も小笹の茂りも陰うすし今を咲きゐる皐月は主役

この春の雨の少なく若葉雨降れば喜ぶ木々もわたしも
希みぬし雨しげく降り庭に咲き生き還るバラを卓に持ちくる
相田みつをの「こころの暦」を子にやればカリフォルニアより礼の電話あり

津 田 美知子 岩手

ただ一人われ往復を運転し夫の病院まで百キロ走る
三陸道は初めて走る道なれば車の流れに遅れぬやうに
病室の窓より夫は吾を見て小さく手を振り笑顔くれたり
リハビリの順調なる夫の退院は早まる見込みと理学療法士言ふ
退院の早まるを聞き帰る道往路より距離の短く感ず
数十年台風等に耐へし木々松喰ひ虫に敵はず枯れゆく
向かひ山の松林に見る赤茶色枯れたる松は年々増える
「高台の我が家にクーラー不要なり」と言へど近年の暑さに設置す

佐々木 政 子 岩手

東北は今日梅雨に入り沖繩の開けたるを聞く列島長し
日毎鳴く鶯の声絶えにけりわれ幾日も元気をもらひぬ
鶯の早朝に鳴かぬのは何故と思ひてをれば風雨となりたり
気遣ふと見せぬ幾度も立ち止まる人と歩めり吾も腰を病む
今朝のわれ着る服薄く換気の風寒く感じて一枚羽織る
青空の清しく広がりわれ一人出でてゆくなり溪流に会はむ

奥 山 清 子 山形

しつとりと重たきに謝す冬雷の合同歌集はわが宝物

涙して看護師言ひぬ今際なる夫言
ひしとふ「家族に会ひたい」
東日本大震災、その時の原発事故等
は次のように詠まれている。

大津波に堤防築き備ふともなぜ降
りられぬいわきの海に
線量の不安のままにいわき市に息
子は住まふらし職変へ難く
祭りといえは子や孫が篠笛を吹くの
でいそいそ出かけ、辣蕪を漬ける、球
根植える、太極拳、グランドゴルフす
ることが沢山。次の歌など自分の勝ち
得た幸である。

烟草と戦ひ過ごし夏去りてしみ
じみ旨し秋茄子の糠漬
(長風叢書第309篇 いりの舎刊)

歌集『白雲悠悠』

日野岳いほ子著
桜井美保子

「彩雲」に所属する日野岳いほ子氏
の第一歌集。昭和四年岩手に生れ、短
歌は昭和四十六年からアララギ東北支

部「群山」で学び、その後、「創作」
を経て平成十九年に現在所属している
「彩雲」に入会された。長く修練を積
んでこられて、このたびこれまでの作
品を一冊にまとめられる決意をされ完
成したのが『白雲悠悠』である。歌集
名は亡き夫君が生前愛した唐の時代の
詩人崔顥の漢詩「黃鶴樓」の一節から
とった言葉であるという。

シクラメンの赫の大鉢抱へもち冬
ざれの径はづみて帰る
たつぶりの雪どけ水を抱き寄せて
うねりつつ下る春の北上川

岩手山間近に仰ぎ憩ひをれば鈴蘭
の香我が身を包む
太きつらら障子にうつる凍れ夜の
冴月美し真夜を覚めぬ
季節の折々に詠まれたこれらの作品
から作者の自然への思いや暮しぶりの
一端が感じられる。

星となり汝をば守ると常云ひし夫
のかがよひ今宵は見えず
夢に出でし夫の若さにたぢろぎて
覚めつつさする痛む腰あたり
「白雲悠悠」と刻む墓石を拭きを

朝日五時に東の空あかく染め書院の窓の松を照らしぬ
山草とは思へぬ華麗さ三十年白根葵は我が庭に咲く
樂しげに夫と義弟語らふを聞きつつ食める湯宿の食事
義弟は明日東京へ帰る人又を約する夫九十歳
はらからは八十代九十代三名の皆健在を親に感謝す
うこぎ垣の剪定終へて足らふ午後胡顔子の実二つ色づきてをり

井上 鈴子 山形

昨年は梅の実落ちるも気づかず病の篤き兄と過ごしき
「お姉ちゃん」と言ひて桜桃の双子果を食ふ兄の孫らは
法要の和尚に唱和する子らの透きとほる声兄に届かむ
父思はぬ日はなかつたと話す甥逝きて一年墓参の道に
法要あと家のめぐりを姉と歩くつくづく思ふ兄の花好き
栗の花落ちる頃には梅雨明けと聞きしが梅雨に雄花は散りぬ
花と木に囲まれてゐる友の庭酔仙翁は生家思はず
ケーキ焼き持たせてくるる友がゐて甘き香のな一日安らぐ

谷田 律子 栃木

引き潮の安芸の宮島鳥居のそばで小さなカニの子拾いてさわぎぬ
心より望んで訪ねる厳島潮の匂いと鳥達の声
晴ればれと飛行機は行く八メートル上空を雨雲くぐりて
先祖ともいえる平家の作りし宮は勝者の証 感動して拝す
広島のホテル・シェラトン最上階より眺める我は田舎者なり

今年こそ皇居の雅楽見学せんとパソコン開き中止にくやむ

塚本 節子 茨城

補聴器の仕上がりにひと月かかるといふ説明ありぬ五月雨の日に
水無月に入り漸く補聴器届きたり陽射しまぶしき梅雨晴れの朝
ロンドンに赴任している息子より「両親に来て欲しい」とラインありたり
父さんは十四時間の飛行は無理と返信したり午前四時過ぎ
躊躇する我が背を押しくる夫の笑顔にわれ一人にて行くと決めたり
パスポート疾うに期限の切れていて慌てて取得の申請をせり
息子よりチケット取れたとラインあり八月朔日から十一日間

高藤 朱美 茨城

今月も短歌教室静かなり先輩休みて既読もつかず
ふうふうとローソク二本消す男孫動画に歓笑おしゃべりを待つ
出張よりパンダのような息子帰宅言葉少なく疲れいるらし
夏野菜まずは長女の家族へと甘味薄しと言ひ訳添えて
優勝と知りて四時間試合見つ全米女子のオープンゴルフ(笹生優花)
スマホより朗らかな声届きたりリハビリ励むわれらの先輩

羽田 孝輝 山形

暑き中葛は旺盛に蔓伸ばし酷暑に負けぬ勢ひ羨む
この次は血糖検査と指示受けてジムに通ひて今日も備へる
町内の長引き受けて三年なり雨降り続く空を見上ぐる
大雨の警報続きし三日間町内被害なきに安堵す

れば丘の上を逝く雲は時なく
軍の検印押されし萬葉文庫本褪せるがままに夫の書棚に
黄昏にしばしのありて欲しきもの
亡夫のひと声少しの気力

夫君への深い愛情が滲む作品に立ち止まり何度も読んでみた。他界されてから相当長い年月が経っているのだから、連れ添った日々の夫を思う妻の心がしみじみと伝わってくる。

黒きうねり目前にして孫いだし山へと駆けし友よ 気丈にも

広漠の海のがれきを照らしをらむ祈りに似たる今宵の満月

復活の旗はなびけど品数の少なき魚市に新巻えらぶ

東日本大震災にて被災した衝撃が詠まれている。未曾有の災害の体験から詠まれた歌は多くの事を読者に想像させる。人間の弱さと生き抜く強さを。

長き長き戦後背負ひて日の目みし動員学徒のセビアのうつしゑ

ペンを捨てて兵器作りに身を挺す世が有りし事伝ふるひ孫へ

戦とは如何なるものか若き等は知

る由もなく迷彩服好む

戦時を生き抜いた体験はこうした作品の中にその思いを感じることが出来る。若い世代に伝えたい貴重なテーマの作品と言えるだろう。

地の揺れと豪雨の激音同時来つたはなにとどつかりと座す

さつくりと咬む歯に応へるかきフライ友よ三陸の幸有難う

いくたびか寝返るなかに「赤い靴」姉のピアノで踊る夢を見つ

ひと冬を伸ばしたる髪バサリ切る心地よきかな吹く川風に

独特の心の世界が感じられる。少しのことには動けない精神、友への感謝、夢の中のダンス。髪を切る歌も若々しく躍動している。作者の生きる姿勢が清々しい。(彩雲叢書第6編)

駒沢信子歌集

『風の行方』を読む

大山 敏夫

二〇一一年から二十三年までの作品を自選、八十歳を記念した第四歌集だ

五月には若葉摘みたる山葵野も雨に洗はれ緑に映ゆる
雨上がりこの夏に聞く初めての蝉鳴く声にしばし聴き入る
玄関の戸を開け見れば紫陽花を父母にあげよと姉置いて行く

立石 節 子 ☆ 東京

記名なき Sunca なれども使用日時を告げしのみにて手元に戻る
障碍者施設の利用続けつつしづかに逝きぬ七十五歳の友
幸せな生涯描き幕を閉づ娘のオルガン孫のヴァイオリン
たのしみな友との約束のコンサート断り無念な一日終わる
白の紙へ中腰になり文字を書く横一メートル縦三メートル
車中では絶えずスマホを操作して一人書を読む中年婦人は

山崎 猛 ☆ 埼玉

団塊の競いて住みし団地には手押し車の老いた人影
元号が三つ変わった世の中を夢中で生きて半寿の祝い
エアコンの故障と知りても忙しく三十七度でやっと修理す
孫たちにホタルの夕べをせがまれて公園までの運転手となる
パソコンの二十五年のデータを瞬時に失い後悔のわれ
梅檀の薄紫の花匂う学生時代の夏の思い出

越澤 太 朗 ☆ 茨城

赤とんぼ群れ来る畑に手を休め友と眺める梅雨の晴れ間に
ミニトマト枝もたわわに粒ぞろい一つつまんで糖度確かむ
我が畑に菜園志願の女性来て雨の畑に花咲く如し

玄関のコンクリートの割れ目より松葉牡丹は今年も芽を出す

土起こすトラクターの後追いて鵜の群れは虫を啄む

友来たり白内障の手術終え免許更新言いて帰りぬ

会報誌の取材に訪れる醸造所「牛久シャトー」は日本遺産

後藤 恭 介 ☆ 茨城

早々と自動車免許更新しあと三年の時間をもらう

先輩の訃報に接し涙する人の一生何を残すか

梅雨寒に「奥の細道」のテープ聞き東北の旅に思いを馳せる

習うより慣れが大事とはげむ夏月一回の料理教室

新緑の公園にボール蹴る子らを木洩れ日の中のベンチで見守る

テレビにて再び学ぶ世界史や古代の歴史に未来を思う

夏の夜にフジコ・ヘミングのピアノ聴く魂のピアニスト追悼記念

岩村 知 康 長崎

天さがる故郷の島にわが向かふ遠き海路の波おだやけし

平戸島の南の崎を遠く見てわが乗る船は北西に行く

越えくれば広らな海に古里の島の岬もいよいよ見え来ぬ

連絡船の乗降客の少なかり昼しづかなる島の棧橋

ふるさとの宅地農地を相続し行き来もなさず十年余り過ぐ

牛を飼ふ人多きとてわが畑も牧草植ゑられ青あをと生ふ

野の道に啼く声聞こゆ牛舎には黒毛和牛の飼はれゐるとぞ

海に向く断崖近きなだり野に牛が数頭群れて草食む

という。二〇一一年と言えば東日本大震災のあった年であり、この歌集でも厳選された十首が載っている。

三陸沖の長き断層が動きたる余波の及びき長野にまでも

盛岡に会ひて三年わが友は津波に吞まれてまだ見つからず

駒沢氏は「新アララギ」所属で現在諏訪湖近くにお住まい。一九七八年に「歩道」に入会して佐藤佐太郎に師事し、「新アララギ」には二〇〇三年に入会している。この歌集は「歩道」退会後の作品を対象にしている。ただし「歩道」時代に二冊の歌集があり、「歩道」「新アララギ」の二誌所属時代の歌集が第三歌集『山の聲』のようだ。

風うけて舞ひ上る雪と渦まきて降る雪ともにわが窓の外

ブラックホールに落ちたる如き静けさか雪ただ雪の山のが庭

巻頭の一連から日常の雪との関わりを歌うものに静謐な厳しさがあつた。歌い方が堅実なのは徹底した作歌研鑽の長さを感じさせた。

言ひさしの言葉を吞みて嚙むなど

わが消極は今も変わらず

という歌もあるが、これは消極ではなくて思慮深さなのかと思う。

ブーチンの仕掛けし侵攻を戦争といふ言葉では括りたくなし

事ありて害かうむるは民衆なりかのウクライナもガザの市街も

ともすれば表面的、新聞見出し的になりがちな難しさも、自身の内面を通す声として強く訴え得るのは「思慮深さ」の賜物だろう。

が、この歌集の素晴らしさは次のような自然との関係を捉えたところか。

たかむらは春の光をもてあそぶ竹むきむきに揺れあひながら

家々の屋根をつかみて虹わたるその半円に木々若葉して

のびのびと大きく捉えている。

とりあへず積み置きし本が保ちある危ふき嵩を歳月といふ

なるほど、こういうところに歳月を感じること多い歌集である。追体験可能な作品世界に共感すること多い歌集であった。

(龍書房刊)

第26回 島木赤彦文学賞 決定

島木赤彦文学賞

島木赤彦研究会主催の第26回島木赤彦文学賞は神田重幸、小口明、新井正彦、久々湊盈子、下平武治、高橋克の六氏の選考により、沢口芙美歌集『変若^{をち}かへる』に授賞が決定した。第24回同新人賞は該当なしだった。沢口氏は昭和十六年大阪府生まれ。現在「滄」発行人。歌集『フェベ』等、歌書『歌人たちの昭和』など。

「うた新聞」7月号より転載

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長 高橋 克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

●投稿などの機会が得られます。●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局 江戸川大学 高橋 克 研究室内

〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四

☎ 〇四(七一二)〇六六一(代表)



編集後記

▽早九月号である。十月二十日の冬雷大会が近づいている。参加者がどのくらいの数になるのか気になるところだが、ともかくも皆様と共に充実感に満ちた大会にしたものである。

▽各批評欄を読むと二ヶ月前の誌面で読んだ時に印象深かった歌を思い出す。批評欄に自分の共感した歌が批評とともに載っていることがあり大変勉強になる。毎月の冬雷誌はその月の作品を読むのが楽しみだが、作品評には評者の感想があり、そういう読みもあったかと気づかされることもある。
▽佐藤靖子さんの歌集紹介も有り難い。受贈歌集の優れた作品を取り上げてくださっている。歌集は読めば読むほど歌の世界が広がるし、自分の力にもなるようだ。

（桜井美保子）

▽自ら癒えたいと或いは自分以外を癒したいと願う歌に惹かれた。東さんは膝関節に効くかとアボカドを四十日も食べ続けたと。治りたい。切実さが痛いほど伝わる。言った人はその影響の大きさを罪深さを思い知るべき。須藤さんの愛犬は寝たまま入浴する。かつて蝮草のある川沿いを散歩した。今はもう走れない犬。癒してあげたいとどれほど思ったであろう。齋鹿さんのできないと思っていた姿勢ができたという歌。読者も嬉しい。癒そうと励まし導くりハビリ医が素晴らしい。（橘 美千代）

▽九月号の編集が残り残すは三ヵ月となった。今月は大会に備えての打ち合わせを編集委員で行う。そして『冬雷二〇二三 作品年鑑・合同歌集』のアンケートの取りまとめとかも知れ忙しいそうだが。
▽今月は村上美江氏歌集『さみどり』の特集となった。『多忙の中で玉稿を賜った諸氏に感謝申し上げる。同書は叢書第101篇であるが、

小誌叢書は、引き続き第102篇は大塚亮子氏が準備中である。また小林芳枝氏が第103篇で準備中。仲間の刊行する歌集なので、会員の皆様には暖かく迎え入れ激励のお便りなどもお願いしたい。今月桜井美保子氏の書かれた『モンキートレインに乗って ファイナル』についても同様かと思う。

▽外部からの刊行物にも優れたものが多い。編集室で受贈した物佐藤靖子氏が毎月紹介してくれているが、そこに加えて、今月も二冊の歌集について桜井氏と私で紹介させて貰った。
▽前納の会費切れ等の連絡が伝わらないケースがあるとの事で対応を事務局と相談した。（大山敏夫）
▽会費切れの方にはその前月の冬雷誌発送の時に封筒の表に詳細を朱筆で記入し振込用紙を一ページ目に入れてあります。その後半年経つてもお振込の無い場合は発送を停止させて頂きますのでご注意ください。何かご事情のある方は早

めに事務局にご連絡願います。▽計報です。

長く冬雷会員としてご活躍されました水谷慶一朗氏は二年程前から体調を崩し作歌を止めておりましたが七月二十七日に永眠されました。九十歳でした。親しくされていた方も多いので此処にご報告をさせて頂き謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

▽村上美江歌集『さみどり』批評特集を読みながら改めて感動を覚えていた。迷いながら苦しみながら前に進もうと懸命に向かう姿勢が自分の言葉で表現されている。そこが読者の心に真直ぐに届くのだろうと改めて感じている。私は跋文を書かせて戴いたので今回は遠慮させて頂いたが新しく気付いた事もあり特集号に参加して下さった皆様に感謝したい。

▽御寄附厚く御礼申し上げます。岩崎聰之介様・橋本千恵子様・竹下成子様・赤羽佳年・児玉孝子（小林芳枝）

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六ヵ月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
 - 作品一欄 ・担当 大山 敏夫
 - 作品二欄・作品三欄（手書き投稿分） ・担当 桜井美保子
 - ・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
 - 白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
 - Eメールによる投稿は左記で対応する。
 - 大山 敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
 - 小林 芳枝 kysie@nifty.com
 - 桜井美保子 mihoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2024年9月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 049-247-1789
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円